

路面電車の誇り

2009/12/30 12:00:00 [社会全般](#)



「スピードアップには、乗降時間と信号待ち時間の短縮が欠かせない」。「広島路面電車を考える」(朝日新聞 2009 年 10 月 17 日)の記事から。

都市における地下鉄化が進む中、広島市内では、依然として路面電車が主流であります。私は以前より、路面電車は地下鉄よりも、高齢者や、子ども、障害者に優しい乗り物であると認識しておりました。上下運動が極めて少なく済むからです。であるにもかかわらず、地下鉄化が進んでいるのは、車優先・健常者優先のまちづくりが行われてきた帰結であるからだ。

その意味において、最後まで路面電車を維持してきた広島を、少し誇らしげに思ってもおりました。しかし、この記事では、その運用方針は地下鉄化と大差ないことが露呈されました。速力化・効率化が第一義とされていることが明白です。

高齢者や、子ども、障害者にとって、電車の乗降は本来時間がかかるものです。杖や、押し車、車椅子等での移動の方や、認知機能が低下し乗降の仕方が分からない方でも、安心して乗降ができるようにするためには、速力化と効率化以外の方針を打ち出す必要性を感じます。

あらゆる生活場面において、速力化と効率化以外の、私たちが安心して暮らせる方針を打ち出す時代に来ていると私は考えます。特に、「社会的弱者」と言われる方たちが、安心してまちづくりに関わって行くことが出来る社会の構築が望まれているはずで、そのような方々が、路面電車を利用する際、当たり前のように、他者の力を借りながら乗降できる。そのことで、多少の電車の遅れが乗じたとしても、乗客は誰一人として不快な顔をしていない。そのような、路面電車の運営を切望します。

そんな路面電車が往来する広島市、素敵だと思いませんか。

ソーシャルワーカーが社会政策にかかわる必要性

2009/12/26 12:00:00 [社会福祉](#)



先月の話になりますが、2009年11月6日(金)の中国新聞の紙面「高い日本の子どもの貧困率」(国立社会保障・人口問題研究所の阿部彩さん指摘)に興味深いことが書かれていました。それによると——18歳未満の子どもがいる家庭に絞った「子どもの貧困率」は(日本において)06年、14.2%だった。

各国共通のデータで子どもの貧困率を比べると、日本(03年、13.7%)はOECD加盟30カ国の平均12.4%を上回り、12番目に高い。さらに着目するのは、日本は、収入自体で計算した子どもの貧困率は12.8%であることに対し、収入から直接税と社会保険料を引き、児童手当など社会保障の給付を加えた再分配後だと、13.7%に悪化する——のだそうです。

つまり、他国に比べわが国においては、「貧困」層に対する税の徴収が厳しく、社会保障が手薄い現状が浮き彫りとなっているということです。以前本ブログにて、格差社会においては、階層の如何に関わらず多くの方がストレスを感じ、「貧困層だけでなく中間層や高所得層でも死亡する危険性が高まること」の記事(読売新聞 2009年11月21日)をご紹介致しました。

現政権がまず行うべきことは、「貧困」層への再分配を率先して行い、この格差を一刻も早く是正することであると認識しています。その意味において、「子ども手当」は、所得制限の無いかたちではなく、「貧困」層により手厚い支援を行うべきですし、現金支給ではなく、現物支給で行うべきと考えます。現金支給であれば、これも先のブログでお話した「定額給付金」の要素と変わらぬ弊害を起こしかねません。各家庭において、手当が子どものために使われなければ、単なるバラマキと言われても仕方ありません。子ども達にしっかり還元される手当の構築が望まれます。

全米ソーシャルワーカー協会におけるソーシャルワークの定義では、「現在の社会政策の改善と開発にかかわる」とその実践内容の一つが明らかにされています。わが国におけるソーシャルワークの現状は如何でしょうか？

このような時代であればこそ、社会福祉専門職が、上記のような政策への提言を行い、その「改善と開発」を実践することが望まれていると考えます。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[送迎車に、福祉施設のステッカーは不要か！？](#)

2009/12/19 12:00:00 [社会福祉](#)



「利用者を自宅から送り出す家族が近所の目を気にしないで済むように、送迎車に会社のマークを付けるのをやめた」。

定期購読中の医療・介護の雑誌の一文。ある経営者の方の実践を取り上げたものでした。ビジネス業界においては、顧客の満足を第一とするのは自明の理ですので、上記の実践は英断と見受けられるのかも知れません。

しかしながら、福祉専門職としては、些か腑に落ちない点がございます。なぜ、福祉サービスを利用する際に、利用者や家族が「近所の目を気にしな」ければならないのでしょうか。社会福祉における自立とは、「他者からの支援を受けながらの自立」があることは大前提です。誰もが、高齢者になり、認知症になり、また、障害者となる可能性を持っています。そして、そのような状況に陥っても、それは社会全体で支援していくことが保障されています。

その、日本人として当たり前にある「保障」を、人目をはばかりながら甘受しなければならないこと自体が問題なのではないでしょうか。そのような現状が地域社会にあるのであれば、社会福祉専門職として地域住民への理解を促進する取り組みをすることこそが本来の仕事であるはずで、それが、権利擁護であり、ソーシャルアクションへと繋がっていくのだと考えます。

また、社会福祉専門職の取り組みは、地域から利用者を切り取って、焦点化してサービスを提供するのではなく、利用者の背景にある地域と利用者を一体的に捉えて支援することが、共通基盤として求められていますし、そうあるべきであると常に考えております。近視眼的な顧客の満足を追求することで、利用者を地域から切り取って、地域を度外視している現状が、特に介護保険事業者の間では根強くあるのではないのでしょうか。自戒の念を込めて、そのように思います。

新しいことに取り組むこと、新しい発想を用いることは、業界の澱みを払拭するためにも、非常に歓迎すべきことであると認識しておりますが、私たちが社会福祉専門職であることは忘れてはならぬ事実でしょう。

如上を整理しますと、社会福祉専門職として、下記の二点から、ステッカーを外すことには反対致します。

- ①利用者の権利擁護の視点から、地域社会の偏見をなくすことが必要であること。
- ②利用者の背景にある地域と利用者を一体的に捉えて支援することが、社会福祉実践者の共通基盤であること。

その意味においては、むしろ、大々的に強調するべきものなのかもしれませんね。

経済学的に言えば、市場ではなく、明らかな準市場の領域で私たちは実践しています。そこに求められるものは、事業性はもちろんのことですが、社会性ではないでしょうか。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

「熟慮断行」

2009/12/14 12:00:00 [社会全般](#)



自身の行動規範の一つとして「熟慮断行」を掲げていますが、私が苦手とするのは「熟慮」の方であると自覚があります。最近拝読した『リーダーは半歩前を歩け—金大中というヒント』（姜尚中氏、集英社新書）において、対談で金大中氏は「何かしようとするときは、三度考えろ」とおっしゃられ、「もちろん、考えても答がでないことは多いです。熟考を重ねれば、誤りはずっと少なくなると思います。そして、熟考すれば、決断した後まよわないですみます。信ずるところに向かって突き進めます」と説明を付言されています。

なぜこのことを今思い起こしているのかと言いますと、速力感のある情報化社会において、私たちは立ち止まって熟考することをしなくなったのではないかと憂慮しているからです。例えば、今日放映されていた「ワイドスクランブル」（2009/12/14 11:25～13:05 テレビ朝日）で、アメリカのタイガーウッズ選手のスキャンダルに対し、コメンテーターのなかにし礼氏は下記の要旨を話されていました。——内容としてはここまで大きく取り沙汰されることではないにも拘らず、アメリカ社会の中でここまで反響があるのは、黒人であるウッズ氏が、関係を持ったとされる複数の女性全てが白人である事実が関係しているのではないかと——というものでした。最近の様々な報道を見ていても、あまりにも皮相的で核心をついたものが少ないように見受けられます。その意味で、なかにし礼氏の如上の発言は、最近の報道では珍しい核心をついたものであると受け止めています。

時勢に急かされることなく、自分のペースで立ち止まり、熟考することが、今私たちに求められているような気がします。人には必ず立ち止まって、自分と向き合う時間が必要だと思います。速力感のある時代だからこそ、その時間を意図的につくっていくことがひとり一人に求められているでしょう。

そして、熟慮の後は、断行するのみです！

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 46 / 57

「定額給付金」考

2009/12/06 12:00:00

[社会全般](#)



本日の新聞の見出し「定額給付金、130万世帯申請せず 190億円が国庫へ」（朝日新聞 2009.12.6.）に目が留まりました。

「景気対策として打ち出された総額約2兆円の定額給付金の対象約5500万世帯のうち、約130万世帯分の申請がなく、金額にして予算の約1%、190億円強が国庫に戻ることが、総務省のまとめでわかった。（中略）申請がなかった約130万世帯は、給付金の趣旨に反対で申請しなかったか、自治体が転居先をつかめず申請書が届かなかったなどの理由が考えられるという。（中略）一方、朝日新聞の調べでは、政令指定市と県庁所在地計50市のうち13市が『使い道が決まっていないなら』『受け取る意思がないなら』などと住民に寄付を呼びかけたが、全体としてはうまく寄付が集まらず低調だった」。

ちなみに、私はこの約1%の市民でした。お金に困っていない訳では毛頭ございませんが、「政策の趣旨に賛成できないから」と備考欄に記載し、受け取りを拒否した次第です。国を挙げての財政難の時代に、2兆円もの資金がいかに使われたのか、そのことに対する検証を是非ともお願いしたいものです。

2兆円あれば何ができたでしょうか？特別養護老人ホームや、グループホーム等の整備不足が声高に叫ばれている中、それらを幾つ整備することが出来たのか？劣悪な耐震構造の小中学校の改築等の整備がどれ程すすんだのか？また、このような投資は、未来に繋がるものであり、一時的・機会的なものではありませんまい。

それにひきかえ、今回の定額給付金は、「焼け石に水」と化してしまっただけではないでしょうか？だとすれば、2兆円の「水」は、あまりにも大時代な浪費であり、かつ、そのつけは私たちへと還元されることとなります。

一人当たりにとっては、少額であっても、それを束ねると2兆円もの超大金となります。それを、有効に運用することが政治の務めです。その2兆円を、社会的ニーズの高い分野に有効に投資することが、政治の役割かと存じます。それを、拒否した今回の政策には、

やはり、賛同はできません。

この機会に、是非とも振り返りの検証をお願いしたいものです。2兆円の「水」が蒸発する光景など、2度と目にしたくはありません。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『運営推進会議のすすめ方』②

2009/12/05 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



前回に続いて、運営推進会議における地域の絆での取り組みと、そこから見えてくる課題についてお話させていただきます。会議における構成員についての続きになります。

構成員で一番声がかげづらく、参加を求め難いのが地域住民の代表者ではないでしょうか。私の周囲では、「一営利法人の会議に何で、私たちが参加しなければならないのか？と言われた」「地域住民に呼びかけたが、誰も反応してくれなかった」といった声を耳にします。対応策は個別具体的な事例によって異なりますが、①介護保険法上でしっかりとした公的な位置づけがあること。であるからこそ、行政職員・地域包括支援センター職員も参加すること②自分たち（地域住民）の課題についても、話し合いが出来ること。つまり、地域住民としても参加することにメリットがあること、を伝えていくことだと思っています。また、初めから強引に参加を促すよりは、どのような会議がなされているのか情報公開（目ぼしい方への議事録資料の配布や回覧板等と通じて）を積極的に行い、声かけのタイミングを計ることも大切でしょう。初めに仲たがいをしてしまうと、今後の機会も失いますので、初期には慎重な対応も求められます。万が一、自事業所のみでは修復不能な程、関係性を損なってしまった場合は、地域包括支援センター職員や、行政職員に間に入って仲を取り持っていただいたケースも見受けられます。

その他、考えられる構成員として、協力医療機関の医師や、警察・消防関係者等に参加を呼びかけている所もあります。いずれにせよ、各々の会議の目的に合ったメンバー構成を考え呼びかけるべきで、誰かれ構わず呼びかけると本末転倒に陥るので注意が必要です。また、同じ肩書きを持っていても、人によって考えの相違がありますので、肩書きで人を選ぶのではなく、その人の考え方や人柄で選ぶことも大切な視点だと思います。事業所からは、代表者や管理者等の決裁権を有する者の参加が不可欠でしょう。無論、現場職員が

参加することも大切ですが、質疑や要望に対してその場である程度即答できることで効率的な進行に繋がりますし、法人・事業所の責任者と直接対話をする機会の確保にもなります。会議の進行については図1の様になっています。各事業所等の勤務時間内で参加されている方のことを考えれば、一時間から一時間半程度の設定が良いと私たちは考えています。毎回の開催日については、初回の会議で定期開催の日程を決め、それに準じて開催していきます。開催頻度は「おおむね2ヶ月に1回以上」（厚生労働省令）とされている通り、各センターによって若干異なるものの、偶数月の第▲○曜日の13時30分から1時間といった設定で開催しております。参加者が多様なだけに、その都度次回の開催日を決めるのではなく、前もって日程が分かるように定期開催とすることにしました。

行政や専門職が参加しやすい日程であれば平日の昼間ですが、ご家族・地域住民の代表者が参加しやすい日程であれば土日の昼間となる節があります。会議の運営だけを考えた時、利用者・家族の参加をまずは最優先するといった発想ではなく、上記参加メンバーが広く参加できる日程を組むべきであると考え、地域の絆各センターでは、平日の昼間の開催とさせて頂いております。私たちは、運営推進会議を家族会等の家族との協議の場であるとは考えておりません。前回申し上げたとおり、①ケア・サービスの質の維持・向上と、②地域住民との協働のまちづくりを大きな目的と考えておりますので、利用者・家族と同様に、行政・専門職・地域住民が参加することも重要視しています。図2で示すように、「利用者・家族」⇔「法人・事業所・職員」の関係（A）のみでは、対立関係に陥ってしまうこともあります。そこに「行政・専門職」「地域住民」等の第三者の視点が入ることでこの対立関係を緩和することが出来ますし、また新しい提案が生まれることもあります。その逆も然りで、多様な参加者がいることで、「行政への陳情の場」となることを避けることも出来ようかと考えます。以上の理由から、会議の目的に合った幅広い分野の方々に参加を呼びかけています。

会議を開催する場所は、センター内の和室や相談室等センターによりまちまちですが、なるべくリラックスした雰囲気を作るように心がけています。毎回お茶菓子と珈琲等をセンターで用意し、和気藹々と談話する感覚で会議を進行します。他の法人では、公民館や地域の集会所を借りてそこで会議を開く例もあるようです。

どのような会議でも、会話のあり方は双方向でなければなりません。一方的に事業所職員が話し続けることの無いよう、出来るだけ事業側の発言量を減らし、参加者の発言を促します。利用者・家族・地域住民等の非専門職の方も参加されることから、話の内容が議題から逸れて行くことや、特定の参加者ばかりが発言する事が予想されるため司会者の統制力も必要です。

地域の絆での会議の内容を進行順にご紹介します。①自己紹介、近況報告、会議の目的確認では、毎回初出席の方がいらっしゃるため簡単な自己紹介や、各自の近況報告を行います。また、会議の目的も明文化し、参加者に確認をお願いしています。因みに、地域の絆で行われる会議の目的は、I 特定非営利活動法人地域の絆の各種理念に基づいたものと

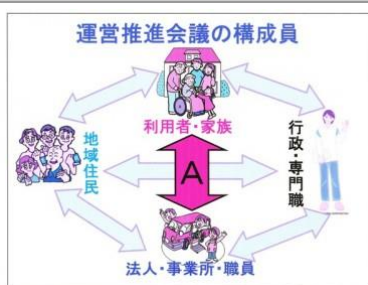
する。Ⅱ地域の社会福祉・生活ニーズに応えるための「地域支援」を念頭に、各関係者・機関とのネットワークを構築し、協働のまちづくりを展開する。Ⅲ事業所における運営状況の情報開示と、参加者からの要望・意見・情報を集約し運営に活かす。Ⅳ事業所におけるサービス・ケアの質の向上を図る、と打ち出しています。

図1 会議構成の一例。皆様のところはいかがなされていますか！？またご教示いただければ幸いです。

**地域の絆各事業所における
運営推進会議のタイムスケジュール**

①	②	③	④	⑤	⑥
自己紹介 近況報告 会議の 目的確認	事業運営 状況 利用実績 説明	サービス ケア内容 の説明	質疑応答 ご意見 ご要望の 拝聴	地域の 課題に ついて	情報 交換
13:30	13:40	13:50	14:00	14:15	14:25
				14:30	

図2 家族会との協議の場≠運営推進会議



[この記事にコメントする](#) [コメント\(2\)](#)

自分の足で見つけたお店！

2009/12/01 12:00:00 [食べ歩き](#)

IL GRIDO（イルグリード）（広島市中区薬研堀）
ポルチーニ茸のパスタ



今から3年前、広島市内の繁華街を彷徨っていると、気になる店構えをしたイタリア料理屋さんを発見。中に入ろうか、入るまいか思案しながら、往来していると、中からお客さ

んが出てくれました。お店の様子を垣間見た際、「こだわり」のある雰囲気を引き寄せられるよう店内へ。「予感」が当たった時ほど、誇らしげで、嬉しいことはないですよ！？以来、広島市内へ出かけた際は、よくよくお世話になるお店です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『運営推進会議のすすめ方』①

2009/11/29 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



地域密着型サービス、特に小規模多機能型居宅介護では、運営上の細かな規制や制約が非常に少ないのがその特徴かと思われま。中等度から重度の生活課題を抱えていらっしゃる方を、住み慣れた地域や在宅で支えていくためには臨機応変なケア・サービスの在り方が求められるのは自明のことですから、これは当然の帰結とも言えます。違った表現をすれば、それだけ事業所側に運営の裁量権が委ねられていることとなります。

だからこそ、事業所ごとに良くも悪くも「格差」が生じることとなります。地域密着型サービスが創設されてもう直ぐ3年になりますが、ケア・サービスの在り方、地域との関係性、運営の仕方に事業所ごとの特色が出てきている様に見受けられます。中でも、独自性が強いのが運営推進会議の在り方ではないでしょうか？

まず、運営推進会議の在り方を考えるに当たって、制度上の考えに触れておく必要があります。「指定地域密着型サービスの事業の人員、設備及び運営に関する基準」(厚生労働省令 第34号)や厚労省から過去に出された「Q&A」の要旨をまとめると図1のようになります。たったこれだけですが、この中から、厚生労働省が意図する事柄や、私たちがこの会議を有効に運営していく方策を見いだすことが出来ます。密室でのケアに陥りやすいグループホームと小規模多機能型居宅介護に第三者の評価の目を定期的に入れ、ケア・サービスの質の向上を狙っているのは言うまでもありませんが、中でも私は、「構成員」の中身に注目しています。利用者の権利擁護が謳われて久しい今日利用者・家族が参加するのは自明のことです。そこに、地域住民の代表者や、行政職員、地域包括支援センター職員が入っていることに私は様々な可能性と意図を感じています。

まず地域住民の代表者ですが、厚労省のQ&Aでは、「町内会役員、民生委員、老人クラブの代表者等が考えられる」と表現されています。これらの人々が会議に参加する意義や、

そのことで望めるべき展望とは、①地域住民が事業所の運営に参画すること②事業所・地域包括支援センター・行政が地域住民のニーズを把握すること③事業所・地域包括支援センター・行政と地域住民が協働でまちづくりを展開すること、が挙げられます。

原則として、日常生活圏域内で完結するサービス提供が基本となる地域密着型サービスにおいて、その利用者は地域住民であり、運営推進会議に地域住民の代表者が参加することは、将来自分や家族が利用するであろう身近な事業所を自らの手で育て、また不備があれば行政に指導依頼を行う住民自治に繋がるのではないかと私は期待しています。

一方、地域包括支援センターにとってもこの会議に参加する意義はあろうと思います。平均して2～3中学校区を対象範囲として活動する地域包括支援センターが、3～6人程度の職員配置で、直接的に地域支援を行うことが困難な現状を鑑みれば、センター管内にある地域密着型サービスを上手くコーディネートし、間接的な地域支援を実践していく視点も必要ではないかと考えるのです(図2)。また、地域密着型サービスのネットワークを築くことも、公益色の強い地域包括支援センターにその期待が寄せられます。

以上のように運営推進会議のあり方を考えていくと、その目的は大きく2つあるのではないかと考えています。①外部の視点を入れ、チェック機能を働かせケア・サービスの向上に繋げる②地域のニーズを把握し、それに応え得る方策を検討する。地域の絆の各事業所では、この2つを常に1:1の配分で会議の運営を行います。以下地域の絆での取り組みと、そこから見える運営推進会議の課題について提言させていただきます。

構成員については、利用者・利用者の家族・市職員・地域包括支援センター職員・近隣事業所(居宅介護支援事業所や介護保険施設等)の職員・市社会福祉協議会職員・福祉系専門学校講師・自治会長・民生委員・老人クラブ会長・近隣住民といった構成になっています。中でも、小規模多機能型居宅介護の対象利用者像を考えると、利用者の参加が難しいことが課題となっています。他の参加者の話の内容を理解し、ご発言できる方が非常に少なく、参加されることは稀にしかありません。であるならば、利用者の権利擁護を担保する別の機会を設けるか、利用者が参加できる会議の体制を整えることが必要だと認識しています。権利擁護とは、利用者の主体性・自発性を引き出し、その人らしい生活を支援することであると私は考えています。であればこそ、自分たちが利用する事業所の運営に主体的に参加する機会を保障する義務が私たちにはあります。利用者が運営推進会議に参加することの意義をもっと大切に考えたいものです。

また、地域住民の代表者について、必ずしも自治会役員の方という捉え方はしておりません。役員の方の考えが必ずしも地域住民の総意だとは考えていないからです。社会福祉協議会の職員さんに参加いただいているのは、法人の理念と社会福祉協議会の理念が一致するからです。いずれにしても、地域住民をはじめ、地域包括支援センターや社会福祉協議会、他事業所に対して、参加をお願いする依頼文を持参し、事業所の理念をしっかりと説明させていただくことが必要でした。地域住民に対しては住民説明会の場で、事業所に対しては40分程度のプレゼンテーションをさせてもらって、その後参加いただいた所も

あります。地域密着型サービスの職員には今後、強く説明能力が求められることでしょう。交渉の基本は、データ・理論・情動性であると私は自覚しています。中でも「情動性」である心意気や思いがなければ、他者の心を動かすことは出来ないでしょう。

今回は、会議の実際についてお話ししたいと思います。

図1 厚生労働省令にみる運営推進会議

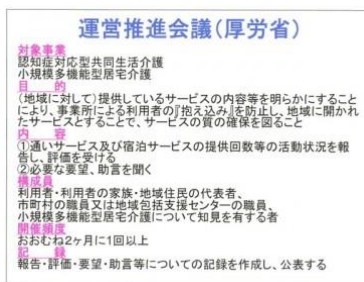
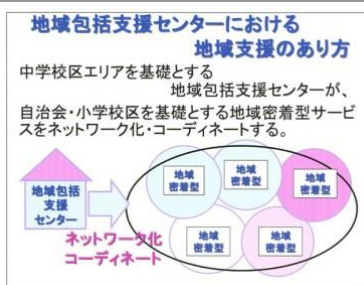


図2 地域包括支援センターと地域密着型サービスの関係



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

地域の絆について②

2009/11/23 12:00:00 [社会全般](#)



なぜ、今地域の絆が求められているのでしょうか？それは、持続可能な循環型社会が求められ始めている現状と、大いに整合性があるようです。

本ブログでもお話ししてきた様に、社会の構造や関係性の中で生きている私たちにとって、「私益」と「公益」は本来相互作用の関係にあるのですが、現代社会においてそれは潜在化され、そうでは無いかの如く「操作」されてきたように見受けられます。なぜ、「操作」

する必要があるのかは、然程深い考察を必要とせずとも、察しがつきます。経済至上主義・競争原理主義社会においては、「私益」と「公益」を分別することがその礎となるからでしょう。いわゆる、勝ち組と負け組を作る必要性があったからではないでしょうか。

しかし、近頃、社会に格差があることは実は、国民にとって良くないことではないかと、理解され始めております。そこで、注目を集めているのが、持続可能な循環型社会です。

そもそも、真に「豊かな」社会とは、循環型の社会そのものの事を言うようです。循環とは、自分たちの行いが、巡り巡って、いずれ、子や孫の代に「返ってくる」ことを意味します。自明の理として、「私益」と「公益」は循環しているのです。その「返ってくる」時間差に、利益を掠め取ることができた人を勝ち組と捉えても差し支えないのかも知れませんね。

「公益」と「私益」を循環させるそんな絆をつくっていきたい！それこそが、誰もが自分らしく安心して暮らせる社会構築への一里塚となるのかも知れません。地域の絆は、持続可能な循環型社会を構築する推進器となるのでしょうか？そうあって欲しいものです。

若輩浅学の私のコメントでは物足りませんので、最近拝読した文献より、引用させていただきます。

「因縁とは、因果関係と縁である。すべての物事や存在はつながっていて、互いに因であり果である。個人の言動は全て「因」となり、必ず未来に何らかの影響を与える。何より、循環して自分に帰ってくる。その反対が直線的な「戻って来ない、循環しない」時間で、戻って来ないから「今のうちに」利益をかすめ取っておけば「勝ち」という考えになる。そこに、取ってしまえる者（勝つ者）と、取ってしまえなかった者（負けた者）が生まれる。これが、近代の「さもしさ」なのだ（『週刊金曜日』2009.9.11.（766号）「風速計」「未来のための江戸学」田中優子氏）。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 47 / 57

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

[ピンチはチャンス！](#)

2009/11/18 12:00:00 [社会全般](#)



数日前、深夜番組で、フィギュアスケート・高橋大輔選手の復活に至るドキュメンタリーが報じられていました。

下半身を負傷し、再起するまで、厳しいリハビリをこなし、恐怖を克服していくその姿に、同じ人間として強い感動を覚えました。

しかし、私が強く心を留めたことは、リハビリを通して、以前よりも下半身の柔軟性を得ることができ、今まで以上のしなやかな動作を手に入れたこと。そのことに対して、高橋氏自身が「怪我をして良かった」と話されたことでした。

私は「ピンチはチャンス」という言葉を常に、抱いて仕事をしていますし、職員にもそのように伝えております。それは、ピンチをチャンスに変える視点こそが、人間を強く成長させると信じているからです。また、ピンチをチャンスに変えることが出来るか否かに、人間としての、一つの能力の、真価が問われていると考えるのです。ピンチをチャンスに変えることが出来る人間こそが、プロフェッショナルであると。

自身の信念を持って、ピンチに立ち向かっていく時にこそ、得られるものは大きいはずです。ピンチは、人を必ず成長に導きます。ただし、そのためには、自身に強い信念がなければ、それは単なるピンチでしかありません。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[地域の絆について](#)

2009/11/15 12:00:00 [社会全般](#)



鳩山由紀夫首相が、所信表明演説（2009年10月26日）で「地域の絆」という言葉を用いて、これからの社会の在り方について提言されました。「これまで日本の社会を支えてきた地域の「きずな」が、今やずたずたに切り裂かれつつあるのです。（中略）かつての「誰もが誰もを知っている」という地縁・血縁型の地域共同体は、もはや失われつつあります。（中略）「あのおじいさんは、一見偏屈そうだけど、ボランティアになると笑顔がすてきなんだ」とか「あのブラジル人は、無口だけど、ホントはやさしくて子どもにサッカー教えるのもうまいんだよ」とかいった、それぞれの価値を共有することにつながっていく、新しい「きずな」をつくりたいと考えています」。

最近、関西方面に訪れた際、左のようなポスターを目に掛けました。

また、「社会の所得格差が大きくなると、貧困層だけでなく中間層や高所得層でも死亡する危険性が高まること、山梨大の近藤尚己助教らの大規模なデータ分析で分かった。

社会のきずなが薄れ、ストレスが高まるのが原因らしい。英医師会誌に発表した」（2009年11月21日読売新聞）。

今社会には地域の絆が、強く求められています。私たち地域の絆は、誰もが、自分らしく安心して生きていける社会の構築を目指して、2006年2月に設立致しました。同じ人間として、考え方の違いを越えることを決して諦めることなく、多くの方々と対話を続け、大きな絆をつくることで、そのような社会の構築ができればと考え、取り組む毎日です。

人類が恐竜時代よりも長期にわたって、地球上で生き延びるためには、地域の中で、誰もが安心して暮らせる社会を構築し、各地で地域の絆を創造し、それを全世界に広げていくこと。これしかない、自身は考えています。

そのような誇りを抱いて、私たちは、更なる邁進をして参りたいと思っております。何よりも、多くの方々との強い絆を大切に。

『地域密着・地域交流を促進する方法④』

2009/11/12 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



事業所が地域密着・交流することの最終目的は、誰もが自分らしく安心して暮らせる地域づくりにあると考えます。無論、そこに至るまでにはいくつかの段階を経なければなりません。例えば——①職員と地域住民の親密度の向上、②地域住民のニーズの把握、③事業所が地域（貢献）活動を実施、④地域住民と事業所の信頼関係の構築、⑤地域住民と事業所の協働関係の構築。これらの段階については、実践レベルでまだまだ方法論が確立していません。一つだけ明らかなことは、段階を漸次踏んで行かねば、一足飛びに最終段階到達は出来ないということでしょう。

であるからこそ、地域の絆では①を達成するために「挨拶運動」を実践してきました。心理学の領域でも明らかなように、挨拶や日常生活会話をする親密度のレベルに達しない限り、それ以上の親密な関係を築くことは出来ません（図 1-1・2）。しかしながら、挨拶レベルの会話であれば、事業所はさほど労力を負担せずとも、職員ひとり一人が意識変革さえすれば即実践可能なものです。レベル2までは、いともたやすく実践が可能であると言えます。地域の絆ではまず、レベル2の地域住民との親密度を構築してきました。これは、何かを実践することを目的に親密になるのではなく、親密になること自体を目的にした取り組みでもあります。まずは、一人の人として住民と親密な関係にならねば、人と人が何かを協働することには決して繋がらないからです。

そして、その上位レベルの親密度が構築されるにつれて、②の実践を試みました。これからお伝えするのは、地域の絆が運営する地域福祉センター仁伍で実践した方法ですが、どの事業所でも実践可能なやり方だと思いますので、是非参考にいただければと思っています。小規模多機能の職員が、ケア・業務に追われる中で、実践可能な方法を考え取り組んだものです。職員が地域住民に聞き取りを行うのですが、その際のルールを以下お示しします——

①期間中（3週間という期限を設けました）出勤した職員は1日当たり、頻度1回以上、時間5分以上、地域住民と日常生活会話を行う

※利用者と散歩中や、送迎や訪問時、出退勤時に実施。

②普段の日常生活会話とは違う、何らかの意図をもった会話（地域住民のニーズを引き出

す会話)であり、広義の生活場面面接であると位置づける。

③「ニーズを引き出す会話」と言われても具体的に理解しにくい(ため、(地域住民が)「困っていること」「望んでいること」を聞き出すように職員に指導する。ただし、「困っていること」「望んでいること」を直接聞かずに、日常会話の中から「真意」を聞き取ることをルールとする。※余程関係性が出来ていないと、直接問われても地域住民は困惑する。

④実施した職員は、記録用紙に会話の内容を記載する。ミーティング用のホワイトボードに用紙を貼付し、その日の情報を全職員で共有する。※共有された情報を、次の会話に活かしていく。

⑤聞き取り調査から、上がってきたものを KJ 法でカテゴリー化する。

一日 5 分程度の会話と、その期間を 3 週間に限定することで実践が可能となり、図 2 の様な結果を出すことが出来ました (3 週間で約 30 回の会話を記録)。

これらの内、私たちが顕著に受け止めたのが、①町内の交流②世代間の交流③文化の継承と④自分の知識や才能を活かしたい、でした。①～③はどの地域にも共通する項目かも知れませんが、仁伍町内会(センターが所在する自治会)も地域活動参加者の年齢層を見ると、40 代以下の参加率がゼロに近い状況でした。であるからこそ、地域文化や活動の伝承・継続に不安があって表出されたニーズであると考えられます。④に関しては、実は地域貢献がしたくてウズウズしているが、それが活動に結びついていないニーズがあることを示しています。これは、地域で困っていらっしゃる方(利用者)の支援を専門職が一方で引き受けながら、「支援したい」思いを抱える住民のニーズを度外視しているがために、両者のマッチングができずにいる双方にとって「もったいない」現状があることを示しています。そして、確実にコミュニティケアの土壌があることを実感出来るニーズでもあります。

それを元に、地域福祉センター仁伍では、小地域支援計画を作成しました。ですから、前号で報告させていただいた地域交流事業としてのイベントは、40 代以下の年齢層を地域活動に巻き込んでいくことを主眼に置いての内容としており、具体的に子どもの健全育成に対するイベントを開催しています。子どもを対象にすることで、子どもの両親に活動に携わっていただくことを狙ってのことです。そのイベントを通して、既存の地域活動の担い手(50 歳以上の方)と、40 歳以下の住民とのマッチングを仕掛けるのです。本イベントを通して、40 代以下のお父さんが 2 名、既存の地域活動に参加されるようになりました。成果はまだまだ大きくありませんが、こういった取り組みは継続性が必要だと考えています。

地域住民のニーズは、事業所と住民の親密度を上げていくプロセスで、理解されてくると思いますが、こちら側に地域住民のニーズを探ろうとする確かな意思がない限り、中々捉えにくいものだと思います。まずは、手探りの中、地域に様々な仕掛けを展開し、一方で「地域住民のニーズは何か？」を常に考え、住民の「声」に耳を敬てる必要があるのではないのでしょうか。

そのことを職員に伝えるためにも、研修の一環として、地域福祉センター仁伍の取り組みを導入されてもよろしいかと思えます。ちなみに、仁伍の取り組みは、半分は、職員に地域を捉える視点を持ってもらうことを目的に研修として実践したものです。

図 1-1 挨拶及び日常生活会話の重要性
(法人全ての職員が、継続実践することが重要です)

挨拶・日常生活会話の重要性

- 挨拶レベル(日常生活レベル)の会話を継続することで、
- 地域住民との信頼関係が醸成され、
- 容易に他人に話すことができない、**より深い会話**を引き出すことが可能となる。

※より深いレベルの会話とは、困っていることや、やりたいこと等即ち、**ニーズに接近した会話**である。

図 1-2 心理学の視点からの親密度レベル
(まずは、レベル 2 の到達を目指しましょう！)

人間関係の親密度のレベル
(日本心理学界の第一人者である河合隼雄氏による)

アメリカの心理学者レヴィンガーは、それを4段階に分類しました(1974年)。

レベル 0
おたがいに知らない、無関係な状態です。

レベル 1
相手を一方的に知ってる状態です。影響を及ぼしあうことはありません。

レベル 2
たとえば、あいさつをかわすくらいの、「顔見知り」という段階です。近所に住んでいる、席がとなりだったなど、物理的に近いというあたりのあいだで表面的な相互作用が生じます。

レベル 3
相互接触段階といわれます。

レベル 4
①底相互作用(知り合い)②中相互作用(友人)③高相互作用(親友、恋人)前の段階より親しくなるためには、たがいに類似性、つまり、なんらかの共通性や共通点があることが、また男女間では身体的魅力も大きな要素となります。

②の段階になると、こころをゆるし、たがいに本来の自分を見せ(自己開示)、より親密になります。自己開示がさらに深まってたがいに依存する関係になると、③の段階に達するのです。

図 2 地域住民のニーズとは！？

近隣住民のニーズ
(仁伍職員による聞き取り調査結果から)

- ◎町内の美化
- ◎自分の知識や才能を活かしたい
- ◎安全の確保(子どもの夕方の安全)
- ◎町内の交流
- ※新興地と旧家の交流・近所づきあい・近所の情報
- ◎世代間の交流
- ※若い人の地域活動参加率の低下
- ◎文化の継承
- ※行事に関心を持ってもらいたい
- ※仁伍のことをもっと知ってほしい
- ◎行事の人手不足
- ◎後継者不足

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

果たして、少子化は問題か？！

2009/11/08 12:00:00 [社会全般](#)



社会福祉研究職の大先輩から、最近、ある指摘を受けました。「少子化はそんなにいけないことなのか？」と。先輩曰く、――

明石家さんま氏が司会をする深夜番組で、生物学者が、アジの回遊について話をしていた。100匹が回遊している水槽に、5匹を追加して入れると、5匹が回遊から外れて、命を落とすというお話。適正な数を保つシステムが、生物界には整っているのではないか。であれば、人間界の少子化現象は、適正な数を保つためのシステムが働いているのかも知れない。今の日本の人口は多すぎるので、調整を行っているともとれる。少子化が問題なのではなく、高齢化にこそその対策が求められているのではないかと。

一見、社会の一般常識から逸脱した発言とも取れますが、私の感覚としましては、「許容」の範囲の発想であり、それどころか、なるほど納得のいく鋭い視点だな、と受け止めました。

つまり、日本の人口は適正人口をはるかに上まっているのかも知れぬと。適正人口をはるかに上回っている社会において、その人口を維持させるためには、適正「容量」を超えた経済成長が望まれるのではなかろうかと。そのことによって、適正を超えた生産性や効率性が、重要視される社会となっているのではないだろうか？と考えたのです。

事実、日本の適正人口は3,000万人程度という研究者がいると聞きます。これは、自給自足での循環の中で、生きていくための適正人口だそうです。

そう考えると、少子化は何も悪いことばかりではなく、効率性や、生産性を至上としない、環境に優しい社会を再構築する契機となるかも知れません。バブル経済の真ただ中、人々の財布の中身は「豊か」になりましたが、人の心までは「豊か」になり得なかった事実を鑑みると、このピンチは、実はチャンスへの一里塚ではなかろうかと考えるのです。

効率性・生産性を第一義とし、非効率・非生産の対象を排他・排斥してきた社会において、そうした生き方が、実は著しく人々の「私益」を減退させていることをしっかりと受け止め、新しい社会の在り方を考える岐路に私たちは立っているのでしょう。

少子化をそのようなチャンスに変換できやしないでしょうか？

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

「私益」と「公益」の関係と、「経済活動」と「社会貢献」の関係

2009/11/01 12:00:00 [社会全般](#)



社会化された私たちの生活を鑑みると、私たちの生活は、常に他者との関係性の中で成り立っていることは自明のことであり、「私益」と「公益」においても相互作用の関係にあります。「自分さえ良ければ・・・」と人々が「私益」に走れば、「公益」はおのずと減退し、「公益」の低下は、そのまま「私益」に跳ね返ってくるわけです。

最近、「コミュニティビジネス」について、若輩浅学ながら人前でお話させていただく機会があり、それに纏わる著書を数冊拝読する機会を与えていただきました。その中で、社会的企業や、コミュニティビジネスの在り方、延いては、企業における社会的責任（CSR）について若干振り返ることが出来ました。実は、地域の絆も、日本の中での社会的企業の確立を意図した実践を行っています。

孫引きを含みますが、気になる箇所を引用してみます。

「J.ガルブレイス（経済・経営学者）は、『不確実性の時代』《1983年》の中で『特定の利益は全体の利益に従属させなければならず、全体に最も役立つことが自分にも役立つという感覚の涵養を目指さなければならない』と述べている。すなわち、健全な社会発展のためには、経済的な利益と社会的な利益が調和するような事業活動を展開することが重要となることを示唆したのである」「P.ドラッカーは、非営利組織の評価に際しては、多様な判断基準の組み合わせやバランスが重要となることを示唆しており、非営利組織の経営には、明確な『ミッション』を持ち続けることが重要となることを説いている」「これまで対立概念として位置づけられてきた『経済活動と社会貢献』『営利企業と非営利組織』といった二極対立の構造を超えて、それらの統合や協調によって、コミュニティビジネスといった新たな事業が生み出される時、従来型の社会経済システムの変革が加速され、真の豊かさを実感する社会が我々の前に出現することになる」（風見正三氏『コミュニティビジネス入門』学芸出版社）。

これからの企業活動には、営利企業、非営利組織にかかわらず、経済活動と社会貢献を常に両輪とした実践が求められます。少子化で、これから急性的人口減少に見舞われる我が国の企業が、生き残れる道は、それしかないように見受けられますし、それこそが、成熟した社会、真に「豊かな」社会構築へと繋がっていくように思われます。

それは、「自分の会社さえ・・・。自分の国さえ良ければ・・・」といった考えが、既に大時代であることを意味します。そして、私たちが、今まで顧みずにきた真の「公益」とは何かを、惟る時が巡って来たようです。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 48 / 57

仙台の味①

2009/10/28 12:00:00 [食べ歩き](#)

成龍萬寿山（セイリュウマンジュシャン）（仙台市青葉区国分町）
「上海ラーメン」「焼餃子」



認知症研究職の大先輩の紹介で、伺いました。

上海ラーメンは、透明度の高いスープですが、お肉の風味があり、コクを感じました。初めて食べた味でしたが、いつまでも記憶に残る味です。

焼餃子も、中の具のお肉の甘みと、焼き加減のバランスが絶品でした。

また仙台に来る機会があれば、必ず伺いたいお店です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『地域密着・地域交流を促進する方法③』

2009/10/23 12:00:00 [地域密着型サービス](#)



地域密着型サービスと銘打たれたサービスを運営する者の避けられぬ使命として、地域密着・地域交流の取り組みがあります。今回は、地域の絆における「地域交流事業」の取

り組みについてご報告します。

地域交流事業とは、私が勝手に命名したもので、各センターで年に 4 回程度のイベント（行事）を開催しています。金子勇氏の「コミュニティ要素モデル」（図 1）に周知の通り、イベントはコミュニティ形成における重要な要素と言われています。地域住民がイベント（行事）を開催するためには、まず、準備期間（時間の共有）が必要であり、合わせて、会議等の打ち合わせ（知識や技術、情報の共有）、物の貸し借り（物の共有）、活動の場の調整（空間の共有）等が必要になります。開催日の運営はもちろん、その後の後片付けから、次回に繋げる反省会まで、イベントの大小によって、中身は変わってきますが、イベントの実施には概ね以上の様な取り組みが不可欠です。そして、その過程を通して地域住民の関係性は深まり、地域に対するアイデンティティも醸成されていきます。

イベント開催における第一の効果は、「交流の促進」にあると考えます。その特性を活かして、地域の絆では、①地域住民と利用者（地域の要介護高齢者）の交流、②地域住民と職員の交流、③地域住民同士の交流を目的に地域交流事業を運営しています（図 2）。各イベントにおける参加者数は概ね 150 人前後。地域福祉センター仁伍における「キャンプ体験」については、地域の小学生（中高学年）30 名程と、大学生ボランティア 20 名程の参加があります（「キャンプ体験」は、地域住民とセンター職員がボランティア団体を立ち上げて運営）。

イベント開催における手順は概ね以下のように進めます——

活動開始時期は、イベント開催日の 2 ヶ月前。まずは、日程を決めていきますが、地域の活動・行事と重ならないように自治会長や公民館長等に事前相談を行います。また、イベントの要旨が地域のニーズに合うものであるのかや、当地域でこのようなイベントの実施が可能かどうかの相談も行います。その後、物品（机や椅子等）はどこから借りるのか、イベントに協力してくださる人、必要な知識・技術を持っている人達の情報を住民との会話の中で集めていきます。集めた情報を元に、地域住民に協力を要請します。戸別訪問や、回覧板、スーパー・コンビニ・ごみステーション・各看板等における貼り紙を通して行います。情報を集める中で、「ワシが、〇〇さんに頼んでやろう」といった形で、人を介しての協力要請が出来ることも珍しくはありません。

前日と、当日の準備は大掛かりなものになりますので、地域住民のみならず、近隣にある高校・大学の学生ボランティア及び、社会福祉協議会を通して全市的に募集したボランティアの方々に御協力いただきます。

その際に私たちが大事にしていることが 2 つあります。1 つは、交流を促進するためのプロセスを重視すること。具体的には、なるべく地域の力を借りてイベントを運営することです。事業所が大盤振る舞いで備品を買って揃えたり、人員配置をしてイベント運営するのではなく、備品は地域の方や公民館等でお借りし、人手や知識、技術は、地域住民のお力をなるべくお借りして運営するように心がけています。

そうすることで、地域住民のどなたが、何を持っていらっしゃるのか？公民館や集会所

にはどんな物品があるのか？餅つきの知識を持っているのはどなたか？大工仕事が得意なのは誰か？といった地域の情報を把握することができますし、誰に力を借りればいいのかの情報を得るために地域住民に相談したり、物品やお力をお借りする過程で、貸し手の住民との交流が促進されていきます。

特に私たちのような地域密着型サービス単独で運営を行っている事業所は、大盤振る舞いする財力も、人的資源も乏しいのが現状です。事業所からの持ち出しも少なく、かつ、地域交流が促進できる。一石二鳥の取り組みであり、苦肉の策でもあります。

それでも人的資源が間に合わないことがありますので、近隣の福祉系大学・短大の学生ボランティアを必ず募集して行います。一つのイベントで平均して10名前後の学生ボランティアの参加があります。これからの社会福祉は、地域支援の視点が不可欠であることを、体験的に学んでもらう、今から5～10年後の専門職の育成を見込んでの取り組みでもあります。

2つめは、このイベントを通して、各センターの機能や設備、職員のことをしっかりと地域住民に理解していただくことです。コミュニティケアを展開していくに当たって、これからは、地域住民と協働して地域の要援護者のケアを行っていく必要があります。住民と協働するためには、地域のために具体的にどんなことができるのか、どんな機能や、設備を有しているのか、どんな専門性や人柄の職員がいるのか等を地域住民に先ずは理解していただくことが不可欠です。地域のことを「真摯に考えている」、地域のために「汗をかいている」専門職であることを将来的には理解していただかなければ、協働は不可能だと考えます。コミュニティケアの実践に繋ぐことも忘れずに、イベントの運営を行います。

一介護保険事業所が、まちづくりに関与する。大きなテーマに何から手をつけていけばよいか分からず立ち止まっている事業所もあろうかと思えます。地域活動の基本は、まずは出来ることから始める。仕掛けながら考える。と考えております。様々な戦略は必要ですが、まず出来ることから、行動を起こしてみたいはいかがでしょうか？

例えば、利用者に提供するアクティビティを地域住民の協力のもとに行うことから始めてもいいのではないのでしょうか？これからの季節、しめ縄作りや餅つきのご指南を地域住民に依頼してみるのもいいかも知れません。

図1 地域行事とまちづくりの密接な関係

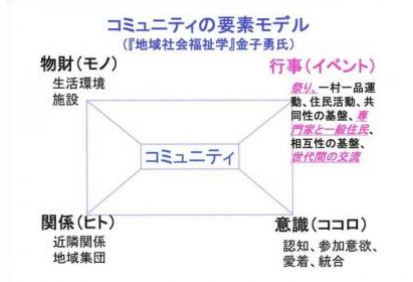


図2 地域の絆の取り組み

センター名	実施内容	実施時期
地域福祉センター 仁佐	「焚き火会」 バーベキュー・鍋会等	毎年3月
	「仁佐こいのぼり」 柏餅・粽作り等	毎年5月
	「キャンプ体験」	毎年8月
	「餅つき大会」	毎年12月
地域福祉センター 向永谷	「ハザー」	毎年4月
	「盆踊り」	毎年8月
	「餅つき大会」	毎年12月
地域福祉センター 宮浦西	「夏祭り」	毎年8月
	「餅つき大会」	毎年12月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

社会福祉は、「私益」と「公益」の繋がりを可視化していく仕事！？

2009/10/17 12:00:00 [社会福祉](#)



本日は、大学院の集中講義を広島で受けました。「ソーシャルワーク特論」という科目です。

その中で、先生より、「私益」と「公益」についてのお話がありましたので、今日はこのことについて、チョットだけ掘り下げて考えてみようと思います。

たとえば、ボランティア活動を例に考えると、個人の社会的有用感や、充実感といった「私益」を前提に活動されている方がいたとします。また、最近ではボランティアのポイント制度を導入されている市町村や、法人もあります（地域の絆でも導入してます）ので、それが、ポイント獲得のための行為であったとしても、これは「私益」を目的とした活動と言えるかも知れません。こういった活動は、「私益」を目的としていながら、結果としては、社会に対する「公益」にも繋がっていると言えます。

また、「認知症の方が、自分らしく安心して暮らせるまちづくり」のための活動は、「公益」活動と言えますが、結果としては、「自分が認知症になっても、自分らしく安心して暮らせるまちづくり」に繋がっていきますので、それは「私益」に繋がる活動と言えるでしょう。

それもそのはず、人は、社会との関係性の中で生きているわけですから、「私益」と「公益」に相関性があるのは、自明の理かも知れません。

大切なのは、私たちひとり一人が、社会の中で相互に支え、支えられ生きていることを前提に、「私益」と「公益」はどこかで繋がっているんだと、自覚することにあるのではな

いでしょうか。

であるならば、福祉専門職は、それを具体的に可視化していくこと、例えば、障害者が安心して活動できる街は、子どもや、高齢者のみならず、健常者にとっても安心して活動できる街であることや、反面、障害者が自分らしく生きていけない社会は、健常者にとっても自分らしさを喪失しやすい社会であることを、伝えていくことが求められているのかも知れません。

また、個々にある「私益」の活動を、調整して、「公益」の活動に変換していくことや、その逆も然りです。地域の絆では、高齢者の方がボランティア活動に参加されていますが、参加者の充実感や、有用感のための活動を、職員が介入することで、例えば、清掃ボランティアから、子どもを対象にした習字教室の先生をしていただくことで、地域の子どものためにも有益な、「公益」活動への変換がなされています。

孫引きになりますが、カール＝マルクスが何と高校生時（1835年8月）、「職業の選択に当面する一青年の考察」という課題作文にて下記のように書いているそうです。高校生がこんな事を考えるなんて・・・。

「地位を選択する場合にわれわれを導くべき主な道しるべは、人類の福祉ということとわれわれ自身の完成ということである。この二つの利害は、お互いに敵対して闘うものであり、一方は他方を否定するはずのものであるというように考えるのは過りであって、人間の天性は、その時代の完成と福祉のために、人間が働く場合にはじめて自己の完成をも達成することが出来るようになっているものである、と考えるのが正しい。

もし人間が、自分のためだけを考えてことをなすならば、たとえ名のある学者、たいへん賢い人、すぐれた詩人ていどのものになることは出来ても、決して完成した、真に偉大な人間になることは出来まい」。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

対人援助に「正解」はない！！②

2009/10/13 12:00:00 [社会福祉](#)



過日といっても、もう数ヶ月前になるでしょうか。認知症ケアにおける大先輩が、下記のようなことを話して下さいました。

——なぜ、あれほど高齢者がトイレに頻繁に足を運ぶのか？それは、排泄を失敗したく

ないという強い思い。つまり、人間として決して冒されたくない「聖域」としての排泄があり、それだけは絶対に失敗したくない強い思いから、前もって、前もって、トイレに行こうと行動されているのではないか？こういった心理状況は、その時（私たちがその年齢）になってみないと、実は理解できないことではあるまいか？その時になって初めて気づける事も多いと思う。

であるにもかかわらず、福祉専門職の中には、「あの人はきっこう思っているのだ」「このようにして差し上げればいいのよ」とあまりにも、簡単に決めつける人が多い。――

人の人生に関わる専門職としての福祉専門職が、自らの「業」に畏敬の念を持たず取り組む事ほど、恐ろしいことはないでしょう。

そもそも、フェルト・ニーズ（利用者が感じるニーズ）とノーマティブ・ニーズ（専門職が感じるニーズ）をすり合わせることで、福祉専門職が取り組むべきリアル（真の）・ニーズを導き出すと教科書には記載されていますが、これを導き出すことは、困難を乗り越えて、不可能ではないかと考えるのです。無論、対人援助職として、一定の目標設定がなされなければ援助は進捗しませんから、目標を設定すること自体は不可避な事ですが、それはあくまで、暫定的なものであり、便宜上のことではないかと思っています。

それほど、他者の人生は奥深く、把握が困難なものであると考えます。無論、人間は、他者の気持ちを全く理解できない訳ではありません。全く理解できないとしたら、映画も、小説も、そして、今私が書いているこのブログも不毛なものとなるはずで、「全ては理解することができないが、その一部は理解することができる」と私は考えます。つまり、人間は他人の思いを想像すること、察することが出来るのです。それこそが、動物の中で、人間が第一義的に優れた能力であると。

であるにもかかわらず、やはり、他者の人生や、思いの全てを理解することは不可能です。そのことを前提に、常に、畏敬の念を抱きながら、これで良かったのかと迷いながら実践していくことが、私たちには求められている気がします。

「正解」や「正義」とは、常に一定の距離を置いてお付き合いしたいと私は考えます。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

美味しそうなオムライスの画像をお楽しみください！⑦

2009/10/12 12:00:00 [食べ歩き](#)



金村シェフのおかげで、「硬いブログ」でオアシスを体験していただけたことと存じます。
感謝！

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 49 / 57

美味しそうなオムライスの画像をお楽しみください！⑥

2009/10/11 12:00:00 [食べ歩き](#)



[この記事にコメントする](#) [コメント\(9\)](#)

美味しそうなオムライスの画像をお楽しみください！⑤

2009/10/10 12:00:00 [食べ歩き](#)

ザ・洋食屋 キチキチ (京都先斗町) 金村シェフ作



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

美味しそうなオムライスの画像をお楽しみください！④

2009/10/09 12:00:00 [食べ歩き](#)

ザ・洋食屋 キチキチ (京都先斗町) 金村シェフ作



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

美味しそうなオムライスの画像をお楽しみください！③

2009/10/08 12:00:00 [食べ歩き](#)

ザ・洋食屋 キチキチ (京都先斗町) 金村シェフ作



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

美味しそうなオムライスの画像をお楽しみください！②

2009/10/07 12:00:00 [食べ歩き](#)



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 50 / 57

美味しそうなオムライスの画像をお楽しみください！①

2009/10/06 12:00:00 [食べ歩き](#)



何分硬い文章の合間に、訪問者のオアシスとしての「食べ歩き」の記事を掲載しております。美味しそうな映像に言葉は何もありません。金村シェフに感謝！！

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

対人援助に「正解」はない！！①

2009/10/05 12:00:00 [社会福祉](#)



「シュヴァイツァーは語る。『超個人的責任の圧力におされて私が合目的なものに屈服すれば、私は生命畏敬への違反によって何等かの意味で罪責を負うことになる』と。超個人的責任に従うことは、非利己的に行動することという考えから、倫理的と考えられがちである。『しかし、倫理的ということは、非利己的ということ以上のものである』。何らかの仕方で無用に生命を犠牲にするとき、私は倫理の内にはいないのであり、自分の存在ないしは幸福を維持しようとする利己的な罪責があるにせよ、多数の他の存在ないし幸福を維持しようとする非利己的な罪責があるにせよ、いずれにせよ罪責がある。われわれはこの倫理の峻厳さを行き過ぎと見なすかもしれない。しかし、『われわれの前の世代が社会を倫理的に理想化するという恐るべき過誤を犯した』というシュヴァイツァーの言葉に耳を傾けるならば、この倫理の峻厳さを厳粛に受け止めなければならない」（『人間と生命』河野真氏監修・田路慧氏編集 ふくろう出版 P.121～122）。

近代化を契機に、全世界的に、多少の犠牲はやむを得ないとの思想の下、少数派が切り捨てられ、排除され、近代化が成されてきた。障害者の処遇などは、その最たる事例であろう。日本はその点において、非常に後進的な状況にあるが、欧米の一部の市民運動の流れによって、全世界的にその流れは変わりつつあるように感じられる。

とにもかくにも、あらゆる物事には「正解」は存在しない。問題なのは、この自明の理を希薄化させ、「正解」がここにあるかのごとく吹聴する輩が多いことである。「正解」を「正義」となぞらえる権力者も米国にいた。「正解」に逆らうものを「抵抗勢力」と罵る権力者もわが国には存在した。特に、権力の側が「正義」「正論」「正解」を振りかざす時には、注視が必要だ。ないものを、権力が振りかざす時こそ、権力の暴走が始まるからである。

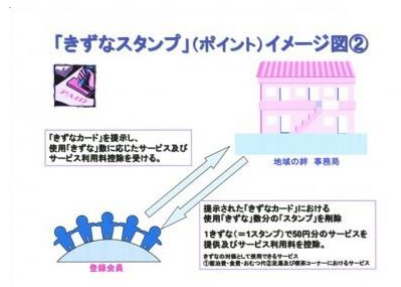
「正解」がないことを前提に、常に私たちの選択が合っているのかを厳然と問いかけて進んでいくこと、そのことの必要性を如上は訴えているように思われる。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

ボランティア制度「きずな」について③

2009/10/03 12:00:00

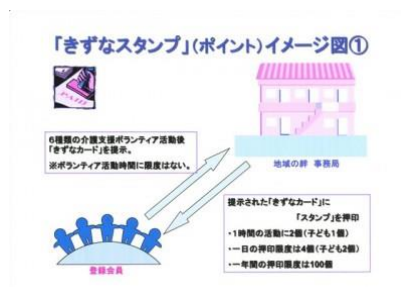
[社会福祉](#)



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

ボランティア制度「きずな」について②

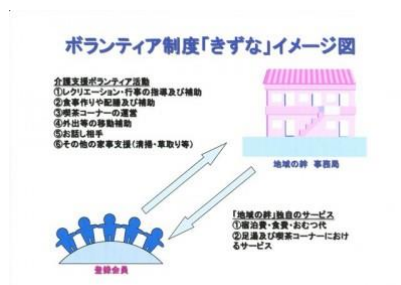
2009/10/02 12:00:00 [社会福祉](#)



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

ボランティア制度「きずな」について①

2009/10/01 12:00:00 [社会福祉](#)



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

地域密着・地域交流を促進する方法②

2009/09/30 12:00:00 [地域密着型サービス](#)



地域の絆における地域密着・交流の実践として、①挨拶活動②相談援助事業③ペットボトルキャップとプラスチックトレーの回収について前回は叙述しました。

今回はその続編として、「ボランティア制度の活用」についてご紹介します。地域密着や交流は、ただ待っていてもなされるものではありません。こちらから、積極的に仕掛けていかねばならないものです。その具体的取り組みとしての報告です。

施設ケアも在宅ケアもコミュニティケアの一環であることは周知の通りでしょう。両者の違いは、利用者の生活拠点が施設にあるのか自宅にあるのかこの点にのみ依拠されています。つまり、地域でなされるケアと言う点において、両者はコミュニティケアの一環と言えるわけです。

私も介護保険施設で働いていたことがあります。施設ケアの場合、このコミュニティケアの視点が持ちにくいのではないかと実感しています。介護保険施設に勤めていた当時、今から6年ほど前のことですが、利用者の主なニーズは外出支援でした。入所者の殆どの方は、1年間で1・2回程度の外出の機会しか与えられていませんでした。今は分かりませんが、無論、当時は他の施設も全く同じような状況にありました。これは重大な権利侵害ではないかと考えましたが、外出支援には人手が必要です。施設内を歩行器でやっと歩ける方が、屋外では車いすでの移動になってしまいます。ほぼ一対一の職員配置が必要です。職員の人員配置からいって、日常的な外出は不可能な状況でした。では、施設職員で対応できないことは、利用者に諦めてもらうのか？

そうではないと思いました。そこで、社会福祉協議会を経て外出ボランティアを募集したところ、5・6名の協力者が得られました。その方々のお力を借りて、一人の職員で5・6名の利用者の外出支援が出来たのです。この経験は、施設ケアをコミュニティケアの視点で捉えた実践だと後に理解しました。そういったこともあって、地域の絆では、ボランティアの受け入れを積極的に行ってきました。

受け入れに関しては、「ボランティア活動における留意点」のご説明をさせていただき、活動内容・活動動機・趣味や特技をお伺いするようにしています。継続的な活動を促進するためです。当法人ではそれに加えて、ボランティア制度を導入しております。地域の絆が運営するセンターで介護ボランティアに参加して下さった方に対して、活動時間に応じて30分で1きずな（50円）分のセンターでのサービスを受けることができるといったものです。1年間で貯めることが可能なのは100きずな（5000円）ですが、きずなには有効

期限がありませんので、10年間で1000きずな（50000円）貯めることも可能です。受けることができるサービスとしては、喫茶コーナーや足湯の利用料、地域密着型サービス利用における食費・おむつ代・宿泊費等に充てることができます。きずなを貯めた本人もしくは、家族の方へのサービス提供が可能です。

数的に参考にしたのは稲城市の取り組みですが、自治体が実践されている多くは、ボランティア活動者の介護予防の視点が強く含まれています。ボランティア制度きずなは、介護予防の視点も持っていますが、第一義は地域交流です。だからこそ、夏休み等で遊びに来る子どもたちもボランティア制度の対象としています。我が国は30年後には30人に一人の方が認知症になると言われています。その時の支え手は今の子どもたちです。少しでもセンター利用者にかかわってもらうことが、30年後の地域づくりに繋がるとも考えています。

制度をスタートさせたのは、2007年11月。制度登録者数は、現在30名。その内、日常的・継続的に活動されている方は7名です。7名の大まかな内訳は、図1のようになります。65歳以上の方のうち2名の方が、要支援高齢者です。その他、年に一度、庭の松を剪定して下さる方や、夏休みに敷地内の草取りをしてくれる小学生の参加もあります。利用者のご家族の方が、不定期に活動されているケースもあります。

但し、制度の対象活動は、あくまで「介護ボランティア」、つまり、センター利用者の支援をして下さる活動の内、図2の⑥項目にしています。NPOの活動・運営にご協力していただいたボランティアの方に、遣り甲斐と、きっかけ、そして、少しの還元を提供する構造になっています。ですので、次号でご紹介する地域交流事業と称した、地域住民を巻き込んだイベントの運営等におけるボランティア活動は、ボランティア制度の対象活動にはなりません。地域交流事業等で活動いただいている登録ボランティアと、ボランティア制度に登録いただいているボランティアを合わせると60名程度のボランティア登録があります。イベント運営におけるボランティア活動などは、どこからどこまでか、イベント参加者で、ボランティアなのか、非常に区別がつきにくく、運営に対して何らかの協力をして下さっている方などは、多いイベントで優に40人は上回っている状況にあるため、制度の対象とするには難しい点が多々あります。また本来、地域福祉活動とは、提供する側と受ける側が曖昧模糊とした関係の中で成り立つものではないでしょうか。

かてて加えて、古くから地域活動の担い手となっている方にとってみれば、ボランティアをどの様に定義するかなどは愚問であり、今まで「当たり前のこととしてやってきた」ことであって、ボランティア制度におけるポイントの還元など、全く興味がなく、よって、制度には登録しない地域住民も数名おられます。ポイントなど還元されなくても、出来ることは協力すると心強いご意見をくださる方々です。このことから、どちらかと言えば、新規のボランティア活動を促進する手段としてこの制度は有効であると考えています。

ボランティア活動の継続性は、その活動内容の量的・質的变化を伴います。継続していく中で、自分に出来ることが他にもあることに気づいていただいたり、また、職員がボラ

ンティアの主体性を引き出すことで、初めは利用者から一步離れていた活動をされていた方が、アクティビティの支援をしてくださるようになったこともありました。

継続した活動をしていただくためには、職員一同常に感謝の気持ちを忘れず、それをボランティアに表現して返していくこと。そして、ボランティアおひとりお一人の活動における自己実現を心からサポートしてく「姿勢」(これだけで十分だと思います)が不可欠です。

今回は、「地域交流事業」と「小地域支援計画づくり」についてご報告致します。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

大阪の味②

2009/09/29 12:00:00 [食べ歩き](#)

大阪鶴橋 またきて屋 (広島県福山市沼隈町)

「野菜炒め」



このお店では、いつも決まったメニューしか頼みません。「豚モダン」と「野菜炒め」だけです。

野菜炒めは、野菜の種類に合わせて、ラードの分量を調整し、丁度よい火の通りで焼いてくださいます。山芋や蓮根、牛蒡等の根菜類が入っているのが特徴です。

季節によっては、牡蠣も入っています。是非一度、お試しあれ！！

もちろん、ビールも注文しますよ！！

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

大阪の味①

2009/09/28 12:00:00 [食べ歩き](#)

大阪鶴橋 またきて屋（広島県福山市沼隈町）

「お好み焼き（豚モダン）」



大阪の鶴橋発祥の「風月」というお好み焼き屋さんは、今やチェーン化が進んで、とても有名になってしまいました。私が学生の折には、今ほど有名ではありませんでしたが、まだ職人さんが焼いたお好み焼きの情趣がありました。チェーン化が進むと、それが希薄化していくことが惜しまれます。

第二の人生を踏み出した地、広島県福山市でも、「風月」以上のお好み焼きが味わえます。しかも、ここには、職人さんが焼いたお好み焼きの風情が残っています。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

「高齢者虐待防止研修講師養成研修」への参加

2009/09/24 12:00:00 [日常](#)



大阪の国際交流センターで、上記の研修が開催されています。認知症介護研究・研修仙台センターが主催されている研修です。

社会福祉分野においては、(社団)日本社会福祉士会が率先して取り組んでこられた分野ではありますが、この度は、認知症ケアから派生する課題としての高齢者虐待といった視点から、認知症の研究・研修機関が主催の研修です。しかも、本研修を受講した者は、職場に帰って、職場内研修を開催しなければならない模様です。

自身の、当法人における認知症ケアの質向上のために、是非ともご協力させて頂こうとは思っております。

大阪府茨木市で27年過ごした私です。大阪の街は、やはり、なんとなく、癒される街で

もあります。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

思い出の味

2009/09/22 12:00:00 [食べ歩き](#)

京都 権太呂 本店（中京区麩屋町）
ざるそば



ざるそばも絶品です。麺の太さと、歯ごたえが私には丁度いいです。麺つゆも、塩辛さと、甘さのバランスがよく、風味も好きです。

やはり、京都のお出汁は美味しいですね！！きっと世界一です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 52 / 57

シュヴァイツァーの倫理と私の社会福祉における立ち位置

2009/09/21 12:00:00 [社会福祉](#)



「これまでの倫理は、『自己自身のみを問題とする自己完成を目指す倫理』と『他者への献身という能動的倫理』の二つを真の意味で一つに結合することができなかった。しかし生への畏敬の倫理においては、『自己に対する真実の倫理は、それと気づかれぬうちに他者へ

の献身の倫理に移っていく』。(『人間と生命』「シュヴァイツァーにおける生命観」河野真氏監修 田路慧氏編集 ふくろう出版 P.118)

もう一つ、フリーのルポライターである鎌田慧氏から、引用してみる。「自分だけの成績があがれば、自分だけがいい学校にはいれば、自分だけがいい会社にはいれば、自分だけの生活がよくなれば、自分の家族だけよくなれば、自分の会社だけ発展すれば、そして、自分の国だけが豊かな、そして強い国になれば。こうして、ぼくたちは、まわりのひとの不幸に気づかず、隣国のひとびとを不幸にしても平然としているようになる。

日本はそうにして、不幸な歴史をつくってきたし、みんなが不自由な時代を送ってきた。他人を不自由にして、自分が自由になれることなどけっしてありえない」(『ぼくが世の中に学んだこと』ちくま書房)。

私は社会福祉の専門職であるが、私の社会福祉に対する価値はこの文章から生まれている。他人を不自由にする社会を自らが構成しておいて、その中で自分が自由になれることなど決してありえない。この自明の理が、私の社会福祉における立ち位置である。

自分が「豊か」な生活を送るために、他者の「豊か」さを追求することが社会福祉の原点であると考えます。認知症の方が安心して暮らせる地域をつくることで、自分も安心して認知症になれることと同じであり、本文章たちと、私の社会福祉に対する立ち位置には、一定の整合性を感じています。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

思い出の味

2009/09/20 12:00:00 [食べ歩き](#)

京都 権太呂 本店 (中京区麩屋町)

卵丼ときつねうどん



元来親子丼が大好きで、大学生の折このお店では、親子丼を好んで食べておりました。ところが、親子丼も然る事ながら、卵丼が絶品だと知人に教えていただき、それ以後、卵丼にハマっています。御出汁と卵の非常にシンプルな組み合わせなのですが、非常に奥行き深い味わいがあります。

ちなみに、きつねうどんの特に、きつねさんも大好きです。甘さと塩辛さのバランスが、

私にとって丁度いい感じです。

とにもかくにも、御出汁が絶品なのでしょう！御出汁そのものが奥行き深いのです！京都に行かれた際は、是非一度お試しあれ！！

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

癒しの時間(キチキチでのひと時)

2009/09/19 12:00:00 [食べ歩き](#)

ザ・洋食屋 キチキチ (京都先斗町)



大阪・京都は私にとっての第二の故郷です。特に京都は、高校・大学時代を過ごした場所。青年時代に過ごした土地には、格別の印象が残っています。

キチキチさんは、オムライスが有名なお店ですが、実は私はオムライス以外のメニューが好きだったりします(また、ご紹介させていただきますね!)。オムライスでも特にふわふわ卵が有名なようですが、私はその中身のチキンライスが好きだったりします。

結局、性格が捻くれているのかも知れませぬ。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

高齢者が安心して暮らせる社会考

2009/09/13 12:00:00 [社会福祉](#)

高齢者が安心して暮らせる地域考

- 川崎市の駅前、都市部の市街地に事業所はある。
人の流れが速い。
 - 開設当初から、送迎で高齢者が車の乗り降りに時間をかけたり、ゆっくりと歩いていると「死ね、くそばあ！」と言われる人は少なくない。
⇒職員一人での送迎は不可能。
⇒一人で送迎すると、「(車を)ここに置くな！」と言われる。一人が下ろして、一人が車を動かす。
- 第1回 全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会 全国大会
2009年11月29日(土) 高槻現代劇場
小規模多機能型居宅介護「ひつじ寓」(川崎市) 代表 柴田 龍子氏

「物質的進歩だけが先走り、精神的進歩との間に大きな間隙を生じている現代、大多数の人々は機械に使われ、組織の中に非主体的に埋没することによって日常生活に疲れ果て、精神的進歩を目指すことが困難な状況になった。われわれはいつの間にか知識と技術の進

歩に酔って、人間の精神性における進歩に心を配ることを忘れてしまったのである」(『人間と生命』河野真氏監修・田路慧氏編集、ふくろう出版、P.113)。

川崎市の「ひつじ雲」という小規模多機能型居宅介護の代表の柴田範子氏は、講演会で図のようなお話をされていました。

インターネットや携帯電話、便利な社会の甘受と同時に、私たちの生活はますます、せわしいものになりました。

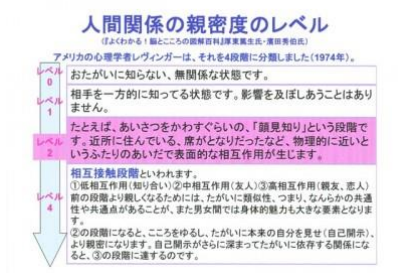
生活課題を抱えていらっしゃる利用者と、共に生きて行くためには、私たちは「非効率」を甘受することも考えなければならないのでしょうか。そのような社会構成の在り方を、福祉専門職は考えなければなりません。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

地域密着・地域交流を促進する方法①【図 2】

2009/09/09 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[前へ](#)

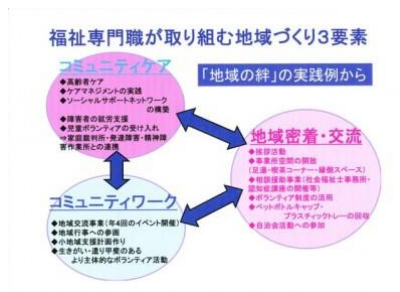
[次へ](#)

Page 53 / 57

地域密着・地域交流を促進する方法①【図 1】

2009/09/08 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

地域密着・地域交流を促進する方法①

2009/09/07 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



地域密着型サービスの理念や、その実践のための「準備作業」について、前回まで述べてきました。今回からは、その具体的な実践過程についてお話したいと思います。

「地域の絆」では、コミュニティケアを「地域の要援護者を地域住民で支え合う行為である」と定義している旨をお話しました。それが、地域密着型サービス運営の目的であると。しかしながら、福祉専門職としての目的はもっと先にありまして、最終的には「誰もが自分らしく安心して暮らせる地域社会の確立」にあると自身は考えております。このような長期目標の存在を熟慮しながら、次回にわたって、地域密着・地域交流について考えます。

また、その様な地域社会の確立のためには、福祉専門職がまちづくりや、地域住民の主体形成に関わっていくコミュニティワークの視点も欠かせません。そこで、最も重要になってくるのが地域密着や地域交流の視点であります。事業所と地域住民の関係性を醸成し、信頼関係を構築する取り組みが不可欠になるわけです。「地域の絆」では、それを図1のように捉えております。

以下、「地域の絆」における具体的実践例をご紹介します。

まず、「挨拶活動」ですが、地域支援活動で大切な視点は「出来るところから始める」です。私たちは利用者から地域へと対象を変えた時、非常に高いハードルを課しているのではないかと思います。大きなイベントを開催したり、大きなシステムを構築したり等。その様に構えてしまうと結局は、何も出来ない状況に終わってしまうのではないのでしょうか？なので、私たちは先ず出来ることとして、開設前から挨拶運動を実践しています。地域住民と道ですれ違った時や、センター内から地域住民を見かけた時に、こちらから積極的に挨拶を交わします。その時に「こんにちは」「おはようございます」にもう一言、「お買い物の帰りですか？」「今日はどちらへ行かれるんですか？」「かわいいワンちゃんですね」など、状況に応じた日常会話を付け加えます。そうすることで会話が広がり、お互いの事をより深く認識し合うようになります。そして、この日常生活会話を継続していくことで、顔や名前、延いては人柄の理解が促進され、信頼関係が構築されていきます。すると今度は、会話の内容も「安易に他人に話すことの出来ないより深い内容」へと変容してきます。「ちょっと聞いてみるんだけど、私の身内が認知症みたいなのよ。●●するんだけど、これって認知症かしら？」といった会話が聞かれる様になります。

私たちが知りたいのは、地域住民が持つニーズ(困っていることや、やりたい事)です。対人援助でも見て取れるように、ニーズに接近した会話は、インテーク(初回面接)時等にはなかなか行うことはできません。やはり、専門職と利用者との信頼関係が醸成されて始めて成されるものです。地域住民との信頼関係も同じで、まずは日常生活会話を繰り返し、継続して行うことでしか成し得ま

せん。そのためにも挨拶(日常生活会話)の継続性は欠かせません(図2)。大切なのは、全職員がその重要性を理解し、行動することです。

「事業所空間の開放」については、前号で述べた通りです。地域住民が来所する余剰空間がなければ、日常的・継続的な来所は望みにくい旨話しましたが、実は空間があるだけでは地域住民の来所は望めないと考えます。よく、特別養護老人ホームでは大きな喫茶コーナーがあるところを見かけますが、地域住民がよく来られている所と、閑古鳥が鳴いていて非常にもったいないなど感じる所があります。様々な理由が考えられますが、問題は明らかに、ハード(空間)にあるのではなくそのソフト(運用の仕方)にあります。地域住民が気軽に来所しやすいような取り組みや、仕掛けを積極的に行っているかどうか? その結果、来所しやすい雰囲気事業所全体が有しているか否か? この辺りが最も重要で、そのための取り組みが、「相談援助事業」や「ボランティア制度の活用」、「ペットボトルキャップ・プラスチックトレイの回収」、「地域交流事業」になろうかと思いません。

相談援助事業は、「社会福祉士事務所」や「福祉よろず相談室」の看板を掲げ、高齢者に限らず、児童・障害者分野のあらゆる福祉相談窓口を設けています。地域住民が、身近な場所で、先ずは、何でも相談できるそんな場所を目指してのことです。また、福祉専門職が持つ知識や、技術を地域資源と化し、地域へ還元する取り組みでもあります。相談料は取っていませんので、主な役割はインテーク程度で、適切な機関に確実に繋いでいくこと(「ワンストップ相談」)を心がけております。相談件数は、月に2~3件程度ですが、偏りなく定期的に様々な相談が上がってきます。中には、専門職からの相談もあり、専門職間のネットワーク作りの一助にもなっています。

ペットボトルキャップの回収は、社会福祉協議会がされているものをお手伝いさせていただく形で、身近な場所での回収場を担っており、プラスチックトレイに関しては、福山市内に本社のある「エフピコ」という企業が実施されている「使用済み食品トレイの回収」に則って行っております。トレイの回収で得た資金は、「地域交流事業」(年4回の子どもの健全育成に関するイベントの運営)に割り当てることにしています。キャップもトレイも週に3~4名程度の地域住民が持参して下さる様になっています。また、トレイは非常にかさ張り保管場所の確保が難しいことと、保管場所がもっと分かりやすく決まっていた方が良いとの地域住民の意向から、地域に住んでいらっしゃる大工さんが事態を見兼ねて、回収箱を製作して下さりました(写真1)。

上記の実践が示しているのは、「何もしないで、待っていても」地域密着・地域交流は促進されない事実ではないでしょうか。次回では、「ボランティア制度の活用」と「地域交流事業」の取り組みについてご紹介します。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(2\)](#)

社会福祉専門職としての政治への期待

2009/09/01 12:00:00 [社会全般](#)



第45回衆院選において、政権交代が実現した。各国のメディアを始め、日本のメディアの反応は例えば、『09年8月30日』は後世、歴史年表に太い活字で特筆されるだろう。日本の民主主義の前進が、衝撃的な数字で示された」（『朝日新聞』2009.8.31.政治エディター根本清樹氏）とあるように、非常に「衝撃的」な取り扱いとなっている。まるで「改革」でもなされたような反応である。

しかしながら、福祉専門職の立場から静観すれば、自民党も、民主党も差ほど大きな政策の変化は見受けられない。ましてや、社会福祉実践に欠かせない、社会構成の視点、つまり、これから100年後にどのような社会を構成していくべきかといった社会的な立ち位置に、両党の違いを見つけることは非常に難しい（そもそも、100年先の社会構成のビジョンを打ち出している政党や政治家は皆無かもしれない。あくまで、推察の範疇ではあるが）。

その点においては、本政権交代は、「改革」でも「衝撃的」でもないと観望できる。

ただし、同じ思想の持ち主であったとしても、同じ人間が長らく権限を行使するのではなく、違う人間が権限を行使する方が、癒着や澱みを払拭する効果をもたらす。その点は、大いに期待したい。

私としては、財政再建（人口減少傾向の真ただ中にある我が国にどれほどの期待ができるのか？）に捉われ過ぎることなく、財布の中身は多少「寒く」とも、社会の中で、誰もが排他・排斥されることなく、自分らしく安心して暮らせる社会の構築を是非とも実現していただきたいと願うばかりである。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(4\)](#)

「有権者の声 国政に望む」2009.8.28.読賣新聞

2009/08/28 12:00:00 [社会全般](#)



介護の現場で働いていることもあり、認知症や障害のある人と本当に共生出来る町にしたいと思って、地域の住民と一緒に餅つき大会やキャンプなどのイベントを年に3、4回企画している。こうした活動を通じて痛感するのは、人口が都市部に集中し、地方では人が減るような状態が続く中、自分たちが住む地域への帰属意識が希薄になっていることだ。行事への参加も中高年が中心で、若い人だちとの世代間の交流が少ないのが実情。

町づくりの中心は住民だが、不景気で収入が不安定になると、自分のことに精いっぱい、周囲にまで頭が回らない。平成の大合併で自治体の規模が大きくなり、地城ごとの特色が薄れていることも問題だと思う。

国は、競争優先の社会とは違った方向を目指すような政策を講じ、権限や財源をしっかりと地方に移して、住民が安心して町づくりを行えるような環境を整えてほしい。

NPO 法人「地域の絆」代表理事 中島 康晴さん(35)福山市木之庄町

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『地域密着型サービスにおける開設手順とハード(空間)について』

2009/07/26 12:00:00 [地域密着型サービス](#)



以前のブログでは、地域密着型サービスにおける開設の条件について、地域性や、ネットワーク、人材面より、意見を述べさせていただきました。今回は、実際に開設するための手順とハード(空間)について一緒に考えて参りたいと思います。

あえて執拗に申し上げますが、地域密着型サービスの目的は、コミュニティケアの実践にあると考えます。なので、開設手順も空間づくりもそれに則ったものでなければなりません。「地域の絆」では、開設地を選定し、図面の青写真ができた時点で、必ず地域住民への開設説明会を実施します。地域によっては、「もう少し(開設計画が)決まった時点で、正式に説明会を開きたい。今は、地域住民間で情報共有だけしておきます」と、時期尚早の反応が返ってくることもあります。それでも、図面の青写真ができた時点での、「地域への相談」の姿勢は決して崩しません。

一つの事例をお示しします。少し想像してみてください。あなたの住んでいる地域に、少し大きな家が建っています。建設が進むにつれて、どうもそれがただの家ではないことに気づきます。近隣住民の噂や、建設地に掲げられた建設許可の看板からです。「どうも高齢者の福祉施設らしい」と。

そして、施設の外観も大体出来上がった竣工 1ヶ月前に、地域住民への住民説明会を開く旨、回覧板等でビラが配布されるのです。そのビラには、「地域密着型サービス〇月開設」と書かれています。

このような「開設までの流れ」は私の知る限り、決して珍しい事例ではないと認識しています。上記の手順で開設される「地域密着型サービス」とは、何でしょうか？真摯に地域のことを考えているのであれば、もっと早い段階より地域住民と協議・相談の場を持つべきではないでしょうか？また、地域住民もそうした事業所の姿勢を見ているのではないのでしょうか？

こうした視点は、地域医療・地域福祉を永らく実践されている諸先輩より、ご指導頂き持ち得たものです。つまり、開設準備段階から、地域住民と共に作りあげる視点で臨むべきではないかということです。そのために必要なのは、なるべく早期における「情報の公開」と「意見の拝聴」です。「地域の絆」では、それを図面の青写真が出来た段階で、展開していきます。

説明会においては、「法人理念」「事業所機能」「建設図面」を主に提示し、包み隠さず「何のために、開設運営するのか」を中心に、思いを込めて、語るようにしております。そして、「当事業所は社会資源であり、地域住民が有効に活用できなければならない」旨をご説明し、「どのような機能があれば有効に活用できるのか？」地域住民にその場で問うことにしております。

その中で、「地域福祉センター仁伍」の開設説明会では、「町内会の役員会をある喫茶店で行っていたが、その喫茶店がなくなってしまったので、5~6人でコーヒーが飲めるスペースがあったら良い」との意見が寄せられ、それに伴って、喫茶コーナーの設置に至りました。その甲斐あってか、5畳にも満たない喫茶コーナーに、365日平均して1日6名以上の方が来られる盛況ぶりです。地域住民と共に作りあげる視点で開設すべきとの諸先輩方のご意見はさすがに思うばかりでした。「意見の拝聴」関しましては、その場で意見が出にくいことを考えて、アンケートの方法を用いてされている事業所もあるようで、これは非常に良いアイデアだと思います。

無論、開設に対して後ろ向きな意見が出てくる可能性も否めません。事実、センター開設に伴って、排水量が増加し、用水路の容量を超える可能性を危惧される意見などが出たこともあります。このような場合、しかしながら私たちはチャンスと捉えて行動します。説明させていただく機会を得ることで、地域住民との話し合いの場が、より多く設定されることになるからです。私たちの姿勢と理念をお伝えするチャンスであると。

反対意見を意思表示される地域は、住民が地域のことを真摯に考えていらっしゃる地域である可能性が高いと私は理解しています。むしろ、「うち(地域)とは関係ない」や「反対も賛成もしない」といった反応の方が、その後の連携が難しいのではないかと思います。反対意見を表明されても、交流のチャンスが得られるぐらいに思っ取り組むべきではないでしょうか。

地域住民との日々の交流を考えた時、ハード(空間)の有効活用は重要な項目であると考えます。事業所職員は、日々ケアに追われる毎日です。こちらから地域に出向くにも限界がありますので、やはり、より多くの地域住民が事業所を訪れてくれれば助かります。そのためには、ケアだけに使う空間以外に余剰空間が必要になります。地域住民が過ごせる空間です。「地域の絆」各センターでは、少ない予算の中から、喫茶コーナーや足湯、ウッドデッキ、縁側スペースを設置し

ています。利用者と職員だけしか過ごせない空間ではなく、余剰空間を確保しておかねば、地域住民は気軽に立ち寄りづらいと考えます。

「地域の絆」では、地域住民が日常的に来所され、そこで、職員や利用者との交流がなされています。その営みが地域情報の収集や、新たな地域関係の構築に繋がっております。イベントを開催するために意見を聴くにしても、毎日住民が来られるので、聞き取りも容易にできますし、誰に協力を依頼するのも、その場で決まったりします。

一般的な地域支援の視点からも、地域住民が立ち寄れる場所、集まれる場所、活動できる場所、情報を集約できる場所等の空間は欠かせません。無論、アウトリーチの視点も重要ですが、それだけではやはり限界を感じます。居宅介護支援事業所や地域包括支援センター等の相談事業における地域支援の取り組みの限界点はここにある気がしています。

その視点からも、地域密着型サービス事業所が、地域支援拠点となることの意義は大きいと考えています。そのハード(空間)を「共助の空間」へと変えていくのです。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(2\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 54 / 57

趣味って何だろう？

2009/07/19 12:00:00 [食べ歩き](#)



過日、地域福祉センター宮浦西の管理者の坂上さんに、「代表の趣味って何ですか？」と問われました。

そう言えば、「何なんだろう??」。

答えがすぐに出ませんでした。このブログの中身を見ても、おカタイ内容ばかりで、少し仕事から

脱線した内容も書いてみようと思いました。唯一の楽しみは、美味しいものを食べることです。27歳まで関西に住んでおりましたので、行きなれた関西圏内のお店にうかがう事が唯一の癒しのひと時です。とは言いましても多忙の故、なかなか足を運ぶことが出来ませんが・・・。

京都先斗町にあります「ザ・洋食屋 キチ・キチ」さんのお料理は最高です。状況に応じて、食材に応じて、相手の体調に応じて、適時最高の料理を提供して下さいます。まさに、天才です！！仕事柄連休はまず取れませんので、休みの前の深夜にご無理を言って、うかがう事が多いです。深夜の高速をETC割引で駆け抜けます。閉店時間を過ぎていても、快く待っていて下さるそんな店主様のおもてなしを受け、そこで、最高に癒されるのです。そして、明日への仕事の糧とするのです！！

[この記事にコメントする](#) [コメント\(2\)](#)

続・「排除の構造」が顕在化してきた時代

2009/07/15 12:00:00 [社会福祉](#)



尊敬する知人の大学学長から、いみじくも先のブログにまつわる話をお聞きました。—————

子どもも近代以前は、「小さな大人」として扱われていた。近代社会が、子どもという概念を作った。労働効率が悪いため、子どもは隔離され、教育現場においても、近代以前は、大人と子どもは同じ場で教育を受けていたが、近代以降、隔離されて教育を受けるようになった。

社会福祉専門職が、このような社会構造を的確に捉えた上で、対人援助活動を行うことは、本来は、必須事項であると考えます。間違った視点で、援助活動を行わないためにも、社会の在り方を問い続けながらの実践が求められるのではないのでしょうか？

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

「排除の構造」が顕在化してきた時代

2009/06/28 12:00:00 [社会福祉](#)



現在私は、県立広島大学の大学院に通っております。ケースマネジメントの研究を行うのが目的ですが、多くの先生方より、たくさんのご示唆をいただき刺激の多い毎日です。

障害学の横須賀俊司先生のお話の中で、江戸時代に知的障害者は存在しなかった旨のお話がありました。当時は、読み書き計算ができる人の方が圧倒的に少なかったからです。そして、先生は、近代化が進むにつれて、資本主義の論理が導入されてから障害者を「収容」する排除行動が見られるようになったともおっしゃられました。

一方、久しぶりに大学の恩師である八木晃介先生の講演を過日拝聴しました。被差別部落が急速に貧困に陥ったのは、近代化が進んでからだとの話がありました。

お二人のお話を合わせて考えると、排除の構造は、資本主義やそれにまつわる競争原理が、少なくともその一因であることがうかがえます。

小泉政権以降の新自由主義という名の、超競争原理社会が、現代の「排除の構造」と如何なる相関性があるのかを、私たちは注視せねばならないのかも知れません。

なぜなら、私たち社会福祉専門職が目指すのは、排除ではなく、包摂だからです！

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

軽井沢での研修

2009/06/27 12:00:00 [日常](#)



昨日から軽井沢に来ています。さわやか福祉財団の安部博先生が主催されている「09チャレンジQ 軽井沢“心隣浴”セミナー」に参加させて頂くためです。全国から三十名の方が参加され、また新たな出逢いの場となりました。野外での演習も、非常に示唆に富むものがありましたが、私はQシートを使ってのご説明の中で、『人間は同時に七つまでは考える事が出来る』旨のお話が頭に残りました。また、文字の字数は五、七、五のリズムで、十七文字までが、人の頭に残りやすい

事や、『良い質問は、正しい答えを出すより価値がある』といったことを習いました。
法人理念の行動レベルへの落とし込みの方法として活用したいと思いました。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(4\)](#)

地域密着型サービス開設の条件考

2009/05/24 12:00:00 [地域密着型サービス](#)



以前本ブログにて、地域密着型サービスの理念について意見を述べました。地域密着型サービスの理念は、高齢者が住み慣れた地域で自分らしく生活できるよう支援することであり、そのためにサービス事業者はコミュニティーケアの視点で臨まなければならない旨のお話を書かせていただきました。

ここで、私が考えるコミュニティーケアの定義について少し叙述します。地域密着型サービス事業者が実践すべき「コミュニティーケア」を私なりに言語化したものです。「地域の要援護者を地域住民で支え合う行為である」。非常に単純です。「地域住民」は、フォーマル・インフォーマルを含むあらゆる社会資源のことを指して考えております（無論サービス事業者もこの中に含まれます）。住民主体の視点を重要視しているため敢えて、「地域住民」の表現にしました。また、「支え合う」とは要援護者も状況に応じて「支える側」に回ることを前提に考えてのことです。「地域」に関しては、高齢者や子どもが、徒歩もしくは自転車で活動できる物理的範囲を考え、自治会及び小学校区の範囲と考えております。

このようなコミュニティーケアの実践を行うことを目的とした地域密着型サービスを開設するための諸条件について、今回は考えてみたいと思います

まず、設置場所についてです。当法人では、既存に地域住民が集まる場所が近くにあることを前提に、開設場所を選んでおります。地域福祉センター仁伍は、自治会行事の殆んどを実施する広場に隣接して開設しておりますし、地域福祉センター向永谷においても、自治会支部行事の活動拠点の広場や集会所から歩いて2分の場所に開設しております。これは以後のコミュニティーケア実践において、効率的・効果的に地域住民と事業所が交流することを考えて、事前に人の集まる流れを調べて選定したものです。

合わせて地域住民が気軽に立ち寄りやすい清閑な場所を選定しています。遠方の方が車で来所するイメージではなく、地域住民が徒歩もしくは自転車で来所しやすい場所をイメージし選定します。つまり、車通りの多い大通りに面しているよりは、少し奥まった公園が近くにある等の歩行

者主体の道に面した場所がいいのかな、と思っております。

また大切な地域との関係性についてですが、あらかじめ何らかの関係性のある地域が望ましいと考えております。例えば、代表者や管理者の居住地や出身地に開設することで、地域との関係性が既にある程度出来ているところから進められる。また、土地や建物を賃借する場合、家主・地主さんが地域との強い関係性を有していらっしゃる場合は、以後の関係性を構築しやすい利点がある等。当法人の仁伍は私の出身地に開設しましたが、向永谷は何ら関係性のない場所での開設となっております。地域住民との関係性構築という視点においては、仁伍の方がやはり優位に進んでいるようです。しかし、関係作りには一定の方法論があると考えておりますので、これはまたの機会でご報告したいと思います。

そして、もう一つ重要な要素は、マーケティングの視点です。私どもの法人はNPOですので、純粋なビジネスの視点では事業運営を行っておりません。しかし、事業であるからには潰すわけにはいかず、理念遂行のためにも経営の視点は欠かせません。そこで、必ず、開設前には、マーケット調査を実施しております。今は便利な時代で、HP等で各地区の人口（自治体によっては町別・年齢別人口）がわかります。あとは、その地域にどのような介護保険事業所が存在するのかや、その定員を調べ、高齢者人口と事業所普及率を鑑みて、開設場所を選定します。これは潰さない経営のためのみならず、地域住民のニーズのない所に開設しても意味がないとの認識からの実践です。私どもの法人は「利益を得る」ことを目的にはしておりませんが、理念を遂行するための重要な要素として捉えております。

また、指定指導監督責任のある市町村の方針と法人の方針が一致しているか否かの視点も重要でしょう。都道府県ではなく、市町村が指導・相談役になることで、行政との距離がより身近なものとなってきました。今後は、行政との協働の関係が強く望まれていくことでしょう。であるからこそ、行政の考え方・方針を事前に熟知しておくことが必要です。

以上は主に「場所」の条件についての話になりましたが、その他の開設条件として、知識と技術、経験を積んだ指導的立場の介護職が数名必要と考えております。私の考えでは、1事業所に最低3名は必要かと思っています。通い・訪問・宿泊あらゆるサービスに対応できるケア技術を有する職員の育成は不可欠ですし、中等度以上の障害を持たれた利用者を在宅で懸命に支えていらっしゃるご家族との連絡調整や連携ができるコミュニケーションスキルや面接技術も欠かせません。小規模多機能を運営する以前、デイサービスとグループホームの管理者をしておりましたが、小規模多機能の職員に求められるケア技術はより高いものであると認識しております。だからこそ、スーパービジョンの体制は欠かせませんし、そのためのスーパーバイザーが最低3名はどうしても必要になると考えます。なぜ3名かと申しますと、日勤帯に常時1名のスーパーバイザーを配置することを考えると、公休・夜勤等の関係でそうなるわけです。

かてて加えて、医療機関との連携が不可欠です。診療報酬の改定後(2006年度)病院の平均在院日数は急激に減少し、そのため、福祉関係者から見た医療依存度の高い高齢者が、在宅生活を強いられる状況にあります。特に小規模多機能型居宅介護事業所は、その多機能性を駆使して、そのような方々を積極的に支援することが求められるでしょう。であるからこそ、日頃から密な

連携が取れる協力医療機関の存在が欠かせなくなります。特に、在宅・地域医療の視点を持つ協力医療機関と連携できれば、利用者も職員も安心できます。

以上地域密着型サービス開設の条件に対する私の考えを叙述しましたが、要点をまとめると下記のようなふうかと思えます。

- ①既存に人が集まる場所(広場・公園・集会所・小学校等)が近くにあること。
- ②地域住民が、歩行や自転車で、気軽に立ち寄りやすい場所であること。
- ③地域との関係性が既にあること(代表者・管理者・職員・家主・地主との地域の関係など)。
- ④高齢者人口が多く且つサービスの充足率が低い等、地域住民のニーズがあること。
- ⑤市町村の方針と、法人の方針がある程度一致していること。
- ⑥スーパーバイザーになり得る介護職が1事業所につき最低3名は配置されていること。
- ⑦日常的に密な連携が取れる協力医療機関があること。

コミュニティケア実践には欠かせない視点ではないでしょうか?このような条件を満たすことができれば、後の運営推進会議の構成や進行も順調に進むことでしょう。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 55 / 57

脱施設への些細な気づき

2009/05/17 12:00:00 [社会福祉](#)



日本の社会福祉におけるケアは、施設ケアを前提に普遍化・意識化されている。在宅ケアであっても、例えば、多くの小規模多機能型居宅介護や、高専賃の運営の在り方をみると、施設ケアを前提とした効率化を最優先した代物であることに気づく。

施設ケア成立の歴史を紐解いて考えても、当時の、効率よく利用者を「収容する」観点からの脱却が今も尚なされていない。問題なのはそれが、施設ケア自身の課題ではなく、在宅ケアにおいてもその意識が引きずられ、無意識のうちに定着していることにある。脱施設とは、まさに、施設ケアの成立から綿々と受け継がれてきたその価値・意識からの脱却を目指すことであり、その価値・意識は施設ケアに限定されて受け継がれてきたものではなく、在宅ケアを含めたあらゆるケア

の場面に浸透している。それは、非常に根深い陋習である。

よって私には、脱施設に対する以下の気づきがある——

- ①効率化・画一化を優先する施設ケアの価値・意識からの脱却。
- ②施設ケアの価値・意識は、日本における在宅ケアを含めたあらゆるケアに蔓延しているので、そこからも脱却。
- ③実際の行動としての、脱施設。

皆さんは、どのように考えられますか？是非多くの意見をお寄せ下さい。お待ちしております。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

非実践家の脆さ(2005年2月11日執筆)

2009/05/10 12:00:00 [社会福祉](#)



現場を知らない学者や評論家・マスコミの言動に思わず首を傾げてしまうことが近頃多くなった。

例えば私たち福祉業界でよく言われているのが、職員配置の不足であるが、現場は現場で人員不足を補うための業務改善に創意工夫を凝らしているし、人員が充実している現場が必ずしも良いサービスを提供しているとは限らない実態もある。

一言でこうあるべきだと言い放つのは格好が良いし分かりやすい。しかし、物事を変革するには小さな作業を地道に積み重ねていかなければならないし、多くの妥協が必要となる。少数派の意見を反映させようと思えばなおのことで、それこそ妥協を通り越して屈辱の連続とも言える作業を強いられる。そして、こうした作業を通してのみ物事は変革されていくのだと思う。

いわゆる学者や評論家の多くはこの実践経験が絶対的に足りないのではないかと考える。現場にいて物事を変革した経験が圧倒的に少ない人間が多いのではないかと思う。私自身の経験で言えば、大学時代の魅力的な講師・教授はみな一度は「社会」で現場を経験した人達であった。

非実践家は総じて脆い。変革が、小さな改善の積み重ねと妥協の産物であることを実感し得ない人の論理にはなんら説得力も魅力も感じない。現場から離れた、実際に離れたとしても現場の感覚を持たない人間の論理には人の心は動かされない。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

二度も起きた爆破テロ(2005年10月3日執筆)

2009/05/03 12:00:00 [社会全般](#)



三年前に続き、バリ島南部の繁華街クタでまた爆破テロが起きた。この爆破テロ、五年前観光客として現地を訪れた人間としては、起こるべくして起こった感が強い。当時、現地で私が記した日記の一部から引用してみる。

「(バリと欧米・日本の)経済格差は揺ぎ無く存在し、その格差の狭間で、日本人・欧米人のリゾート地として発展してきたのだろう。揺ぎ無い経済格差、問題はそこに訪れた外国人ひとり一人がそれをどう捉えるかにある。『安く遊べる!』ただ単にそう思う人も多くいると思う。また、人権感覚の希薄な人は発展途上国の人を馬鹿にしたり、差別意識を持って来る。(中略)1ヶ月9000円程度の給与で生活している人々の前で、何万円ものお金をばら撒いて平気で遊べるこの感覚。それが全てを物語っている。欧米人もこれに同じだと思う。クタの少し裏通りで、欧米人が音楽に乗ってダンスを踊り飲み食いしているそのお店の横には、行き場のないかのような現地の子どもが座り込んでいる。どっちがその土地の『主人公』なのか分からない。人の地で、我が物顔でそのような振る舞いの出来る欧米人には“頭が下がる”。日本人もそれと同様の有り様だ」。

当時の外国為替は一円＝約75ルピア、現在は一円＝90ルピアである。依然として根強い経済格差は現在も存在する。現地を訪れる観光客の、人権感覚は果たして変わっているのか？

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

終りがあることの素晴らしさ(2003年8月13日執筆)

2009/04/26 12:00:00 [社会全般](#)



ありきたり・素人的な表現と笑われるかもしれないが、最近終わりのあることの素晴らしさを実感している。同じくありきたりな表現でこの世のあらゆる物・事柄には終わりがあるのだが、このありきたりな感覚が実社会ではなんだか稀釈されている様に思われる。

終わりがあることは素晴らしいことであって終わりがあるからこそ人間は輝いて生きられる。

結婚や恋愛・仕事も同じでそれは永遠に続くと言われているものではない。だからこそその間、人は生き生きと輝いていられるのである。

恋愛や結婚の話で言うと連れ合いと永遠に一緒にいられる訳ではない。死別にせよ破局にせよ必ず終わりが訪れる。だからこそ今お互いを大切に生きていけるのだと思う。結婚すれば死ぬまで夫婦であるという時代は終わったが、まだその義務感・「常識」の呪縛から社会は解放されていない。結婚すればお互いがお互いの永遠の連れ合いとなる様なそんな感覚がどこかに残っていたりする。お互いがお互いの永遠に約束された連れ合いであると実感した時、人・その関係はときめきも輝きも失う。終わりがあるという大前提があるからこそ今この時を大切にしたいと考えるし、相手を大切にしたいと感じるのである。そういったことを考えると、一般的に結婚より恋愛にときめきがあるのはその終わりがあることがより実感される為であると言えなくもない。人生も同じで「いつかは死ぬ」と実感して初めて自分が信じる後悔のない道を力強く生きて行けるのだと思う。

終わりがあることを実感して生きて行くと、色んな事に感動できるし物事がきらめいて見えてくる。ときめきが生まれる。「終わりがあることの素晴らしさ」と書く所以である。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

科学の「発展」と人文の衰退(2004年6月14日執筆)

2009/04/19 12:00:00 [社会全般](#)



科学の進歩と共に私達の生活は果たして発展・進歩しているのか？近頃疑問に思うことが多くなった。

例えば、今深夜番組を見ているが、私がテレビを見ている数百・数千キロ離れた地域の現在の生活場面が映し出されている。テレビがなかった時代には考えられない様相である。

茶の間にいながら、数千・数万キロ離れた今現在の情報がいとも簡単に手に入る時代になった。また科学の進歩と共に、職業の職種も増加し、仕事の専門化・分業化が顕著になった。これらのことを人類の幸福と考えるか不幸と捉えるか。極論ではあるが、私は人類の不幸であると思えてならない。

情報に関して言えば、テレビやインターネットなどにより件の数千・数万キロ離れた他者の生活をうかがい知る事が出来る一方、それを意識して生活せざるを得なくなった。異文化の今までは知りえなかった地域の情報をしかも適時映像で「知る」事によって、私達の文化・生活様式に変化が起きている(もちろんその情報は偏向したものである)。これにより、文化・生活様式の画一化が進み多彩な文化の崩壊につながっているのは間違いない。

職業の専門化とは聞こえが良いが、言い換えればその部分部分ではスペシャリストではあるが相対的・総合的に物事を見れない人間の集まりであるとも言える。

科学の進歩と同時に大きく失って来たのはその「過程」ではないかと思う。物事における全ての「過程」を効率のために分業化・専門化してきた中でその「過程」を潜在化させていった。例えば、スーパーで切り身のパック詰めになっている肉や魚・野菜・果物等などから、家畜で育てられ食肉センターで殺される牛の姿や種から苗を育て苗から野菜・果物を栽培する農家の姿は見えてこない。

「過程」の存在を知らず「結果」の認識しか持たない社会は、物事の本質を見抜く力を持たない。それが確実に人文の衰退につながっているのではないかと考える。

そう考えると科学の「発展」と人文のそれは反比例の関係にあるのではないかと疑念を抱いてしまう。『週刊金曜日』471号(2003.8.8.)「風速計」にて本多勝一氏は自身の鼎談から次の一節を引用している。「原爆までつくってしまった科学の無茶苦茶な発展ぶりに比べて、人文のほうは、ソクラテスや司馬遷の時代から、果たして進んでいるのだろうか」。鋭い視点であると感激した記憶があるが、実は科学の「発展」に比べて人文はほとんど発展していないのではなく両者は反比例の関係にあるのではないかと思うのである。少なくとも科学の「発展」は人文の衰退を招いているように思われる。

文頭より科学の発展と書けず進捗と書いたのはそれが直接人類の発展につながっていないのではないかとその思いからである。人類の発展に繋がる真の発展こそが今後の科学の課題であろう。

人類はさほど有能ではない。が、科学の「発展」を礎にその限界を感じずに今日までやってきた。その限界を認識し、そのありよう(パラダイム)の変革を迫られる時期が目の前に近づいてきている。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 56 / 57

介護保険への思い 2006年3月29日執筆

2009/04/12 12:00:00

[社会福祉](#)



介護保険改正法がこの4月全面施行され、介護保険制度が7年目を迎える。この時期に、この制度を今一度総括する必要性を感じ、今これを書いている。

端的に功罪という形で現状を分析すれば、功として思い浮かぶ点はただ一つ。介護サービスの質の向上、この一点に尽きる。特に、サービス業としての接遇面におけるサービスの質は格段に向上した。これらは、営利法人やNPO法人など多様な事業所の参入が、競争をもたらした結果と言える。この点を評価しつつも、しかし、と本論に入る。

競争によって、得られたものは大きいですが、失ったものもまた大きい事に、福祉専門職を含め多くの人々は気づいていないのではないかと思う。それは、地域力である。

事業所間の競争が激しくなると、サービスの質の向上と同時に、営業・広報活動も激しさを増してくる。そして、各事業所職員は利用者のことを「獲得」の対象として見るようになる。一昔前までは、近隣事業所同士和気藹々とした雰囲気の中で、地域の高齢者をお互いに支え合っている感覚が強かった。しかし、介護保険法施行から6年が経過した現在、そのような感覚はほぼ消滅しつつあるのが現状だ。地域福祉という観点は希薄化され、自身の事業所さえうまく行けば良いといった風潮が強くと流れている。

更に問題なのは、「顧客」と化した利用者には、福祉専門職としての自立支援や残存機能の

活用といった視点を度外視した、単なる利便性としてのサービスの提供が行われており、結果、本人・家族そして、地域の自立機能・残存機能は低下を来たしている。各事業所は、専門性を度外視した単なるサービス業に成り下がり、サービス利用者も、お金さえ払えば、両親の介護をしなくても良い、便利なサービスを受けられると言った感覚に陥っているように思えてならない。

介護保険制度は、その財源の半分に税金が投入されている。つまり、釈迦の手のひらの上で守られながら商売をしているようなものであり、この点において、介護保険サービスはビジネスには成り得ない。つまりこれは、純然たる市場ではなく明らかな準市場である。これを得意げにビジネスだと言う事業者は多いが、市場で言うとマジに失笑を買う。市場に比べて恩恵を受ける代わりに、地域社会への貢献を行う事が社会福祉事業経営の本質だと私は思う。

競争原理は、個々の能力の引き上げを生み出すが、連携・共同の視点を希釈する。小泉政権下、金科玉条の如く「小さな政府」が叫ばれているが、小さな政府は競争原理を生み出し、連携・共同感を阻害する。大切なはそのバランス感覚なのだが、そのバランスを取る支点（政府）が、どうも壊れているように思えてならない。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

「公益」を顧みない福祉施設の末路 2005年11月執筆

2009/04/05 12:00:00 [社会福祉](#)

市井では、介護保険制度の導入も相まって普通法人から公益法人まで、様々な経営主体が福祉施設を運営している。そうした中、競争を意識してか、公益事業を行わない法人が増えてきている。

言うまでもなく殆どの福祉事業はビジネスではない。支援費制度はもちろん介護保険制度においても、一定の公的資金が報酬に含有されているからだ。そういった意味では、収支バランスだけを考えれば、「儲かる」仕組みにはなっている。しかしそれは、直接収入に結びつかない、例えば制度外の社会的ニーズに応えるための活動を展開することへの「報酬」でもある。

今日こうした直接収入に結びつかないいわゆる公益事業を展開している福祉施設はいかほど存在するのか？社会福祉法人が税制上の圧倒的優遇措置を受けているのは、このような公益事業を使命的に行うことが前提であるが、社会福祉法人は公益事業を積極的に行っているのか？昨今の、公益法人制度改革の意図は別のところにあるのだから、社会福祉法人の多くが公益事業・活動を行っていない組織であるならば、件の優遇措置を絡め取られたとしてもそれは仕方の無いことかも知れぬ。

介護保険施設の利益率が、民間病院の約五倍である事が最近厚労省から発表された。「儲ける」だけの視点で経営を続けていると、「報酬単価」は必然的に下げられる。財政破綻寸

前の行政も、まだ「余力」があるのならと、喜んで支出を抑えよう。これからの私達の仕事は、その付加価値として、いかに公益事業を仕事として地域に根付かせて行けるかに懸かっている。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

職業としての福祉専門職（本当に3Kの職場??）

2009/04/01 12:00:00 [社会福祉](#)

職業としての福祉専門職（本当に3Kの職場??）



「介護人材確保」など、社会福祉の現場で人手不足が叫ばれています。原因は、低賃金や、3K職場である事が取り沙汰されています。

低賃金であることは自明のことであり、これは大きな問題です。法人経営者ばかりではなく、政府が責任を持って対応すべき問題でしょう。

しかし、定着率という視点で考えると、給与が安いからやめていくという問題点は若干薄れてしまうのではないのでしょうか？給与が安いのは今に始まったことではありません。入社時から分かっていたことです。無論ライフサイクルに合わせた昇給が見込めないから、辞めることもあるでしょうが、多くの方は高給取りを目指してこの業界に入職したのではないと言えます。では、なぜ辞めていくのか？職場の人間関係等様々な問題があると思われかもしれませんが、「自分の理想としている福祉現場」でないことも要因の一つではないでしょうか？無論、福祉現場は職員が自分たちの思いと力で作り上げていくものだと思います。しかし、いくら努力しても作り上げていくことが出来ないとしたら、それは、法人理念や、経営者の思いや考え方が、職員が理想としている福祉現場と乖離した所にある場合発生するのではないのでしょうか？

介護保険の導入後、利用者が顧客と化し、株式会社も社会福祉法人も大差ない運営方針に転換してきた様に見受けられます。そんな中で、自身を含め、私たちがなぜ福祉専門職として働いているのかを鑑みると、社会的責任感や、使命感を全うできることや、目の前の利用者・家族・地域住民に感謝されたり、有用視されることに、遣り甲斐や自身の有用感を抱くことができたり、延いては、自身の自己実現を全うするために働いているのではないのでしょうか？

私たちの職場は3K的な側面があったとして、それが全てでしょうか？これはマスコミの責任ではありませんか？ある特定のマイナスの要素だけを誇張して情報を流すことは、偏見を助長することに繋がります。世界でも最大手の自動車会社の車で、年間数千人の人が命を落としています。自動車事故です。このように、多くの仕事には正の側面があれば負の側面が常に両輪としてあるわけです。私たちの仕事はどうでしょう？きちんとした、専門的価値・知識・技術に則って、利用者の支援をする限り、社会に対して負の側面をはじき出す要素は非常に少ないと言えます。だからこそ、私はこの仕事をしています。

地域の絆では、職員の採用面接時、必ず「法人理念」・「運営理念」・「運営方針」・「3つの（接遇）ルール」を読んでもらい、感想をお聞きしています。法人の理念に共感していただけているのかを確認するためです。法人理念を是非ご覧いただければと思います。福祉専門職として成すべきことが、そこに詰まっています。共感いただける方は、職員として、ボランティアとして、協働者として、連携者として、また、利用者として、様々な関わりを持っていただければと思っております。本ホームページが、そのような新たな出会いの場となれば幸甚に存じます。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

2009年3月26日(朝)東京汐留

2009/03/26 12:00:00 [日常](#)



今日は『小規模多機能型居宅介護者の集い』（主催 小規模多機能型居宅介護事業者連絡会）と題した研修に来ています。全国から様々な情報が流れているので、キャッチして有効に活用したいと思います。

そして、専門性、都道府県の枠を超えた幅広いネットワークを構築したいですね。古い視点ですが、今の私はまだまだそんなレベルです。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『地域密着型サービスにおける理念と課題』

2009/03/25 12:00:00 [地域密着型サービス](#)

地域密着型サービスは、地域で様々な問題を抱えていらっしゃる高齢者が、住み慣れた地域で、地域の特性に応じた多様で柔軟なサービスが受けられるよう新たなサービス体系と

して創設されました。

一方、厚労省社会・援護局長の私的諮問研究会である「これからの地域福祉のあり方に関する研究会」においても、「分野別のフォーマルサービスの整備は進んでいる状況」とし、「●介護保険制度では、地域密着型サービスの創設、●医療保険制度改革では、在宅医療の推進、●障害者自立支援法では、障害者の地域での自立、●精神障害者の地域への移行、等が行われている」とあるように、社会福祉制度全体の流れが、要援護者を地域で支え合う取り組みの促進の中にあります。

最もこれは社会状況を鑑みれば、自明の流れとも言えます。短期債・地方債合わせて約 850 兆円の財政難で、先進国も含めて少子化の現状であり経済成長は見込めず。また、核家族化が漸次進み、家族機能の細分化も顕著です（2008 年の一世帯あたりの人員数は、2.51 人であると推察されている《国立社会保障・人口問題研究所》）。いわゆる公助・自助機能の低下を、互助・共助で補完する方策が欠かせなくなっているのです。またそれは、地域の課題を地域で解決していく力としての地域力向上への働きかけに、福祉専門職が関わっていけねばならぬ状況を示唆してもいます。

この様な社会福祉制度変遷の中における地域密着型サービスの特徴としては、一般的には以下の点が挙げられます。

- ①市町村がサービス事業者の指定、指導監督権限を有する。
- ②原則として、当該市町村の被保険者のみがサービス利用可能とする。
- ③市町村又は日常生活圏域ごとに必要整備量を計画に定め、これを超える場合には市町村は指定の拒否ができる。
- ④地域の実情に応じた弾力的な基準・報酬設定ができる。

日常生活圏域の設定については、市町村合併の促進により、市町村の範囲は拡大したが、介護サービスの提供範囲は小さく区分していこうという一見矛盾した実践とも言えるでしょう。

サービス実践過程においては、次の 2 点を私は重視しています。

- ①日常生活圏域が設けられ、専らその中でサービスの提供を完結しなければならないこと、
 - ②運営推進会議の設置が義務付けられ、利用者、家族はもちろん、市町村職員、地域包括支援センター職員、地域住民の代表者等の参加規程があり、そこで、サービスの質の維持向上のみならず、地域ニーズの掘り起こし、延いてはまちづくりに事業所が関与していくことが示唆されていること、
- です。

特に、運営推進会議の構成員に地域包括支援センターの職員が含まれていることは、地域包括支援センター自身の運営にも好影響を及ぼすものだと考えています。

私の考える地域密着型サービス運営の目的を一言で表わすと「コミュニティケア（地域ケア）」となります。つまり、地域密着型サービスの理念が、地域で末永く要援護者を支えていくことであれば、それは福祉専門職だけでなし得るものではありません。地域住民・商店等あらゆる社会資源を活用したコミュニティケアの実践が不可欠となります。事業所が設置されている日常生活圏域内の利用者のみを原則対象に、サービス展開を実践するのであれば尚のことです。よって、地域密着型サービスはコミュニティケアを率先して実践すべきサービス類型であると私は考えています。

地域密着型サービス運営における最大の課題は、事業所側の意識にあると考えます。2000年に介護保険制度が導入され、利用者が顧客と化し、地域で共に支え合う対象から、「獲得」の対象に切り替わりました。その結果、各事業所におけるサービス・ケアの質は格段に向上しましたが、そこで失ったものは、地域で連携する視点ではないかと思われます。その状況下で、2006年突如地域密着型サービスなるものが現れ、グループホームなどは必然的にその指定を受けました。今まで、地域に根差した実践をしていなかった事業所が殆どで、いきなり、「地域と密着しなさい」「地域住民を呼んで、運営推進会議を開催しなさい」と言われても、どのように地域と関わってよいのかわからない、そういった事業所が未だ多いのが現状ではないでしょうか。当法人にも、「どのように地域と関わったらいいのか?」「運営推進会議をどのように進めるべきか?」といった問い合わせ、相談が未だに多く寄せられています。

また、一部の経営者にあつては、地域と密着することが事業所収益とは直接関係のないものであるとの認識が窺えます。これはとんでもない誤解であり、日常生活圏域の中の利用者のみが対象となるサービス類型において、地域とのつながりがなければ、利用者サービスが結びつかず、それは利用者の減少に繋がる羽目になります。

また、地域密着型サービスの対象者像は、地域の認知症高齢者である。小規模多機能型サービスをはじめ、地域密着型サービスは利用者の抱え込みに繋がるとよく言われてきましたが、在宅（地域）で認知症高齢者を支えることを全て自ら抱え込みたい事業所はあるだろうか?当法人の実践の中に、要介護2で独居生活をされている認知症高齢者の支援事例があります。身の回りの最低限のことはご自身で何とか出来る（無論十分にできてはいない）が、火の不始末や服薬管理、金銭管理、排泄の後始末、買い物、清掃、ゴミ出し、庭の草取り等、様々な生活支援が必要になってくる。こうしたケースの場合、全てを事業所職員で対応することは不可能です。そこで、当法人では、日々の見守りや、草取り、ゴミ出し、買い物等を、地域住民の協力を得て実践しました。結果として、事業所の負担は軽減したのです。

このように、コミュニティケアを実践し、地域力（地域の支える力）が強くなればなるほ

ど、経営は楽になる、そういった意識を地域密着型サービス経営者にはぜひとも持っていていただきたいと私は考えます。逆説的に言えば、その取り組みがなければ、今後経営が成り立たなくなるサービスです。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[次へ >>](#)

Page 57 / 57